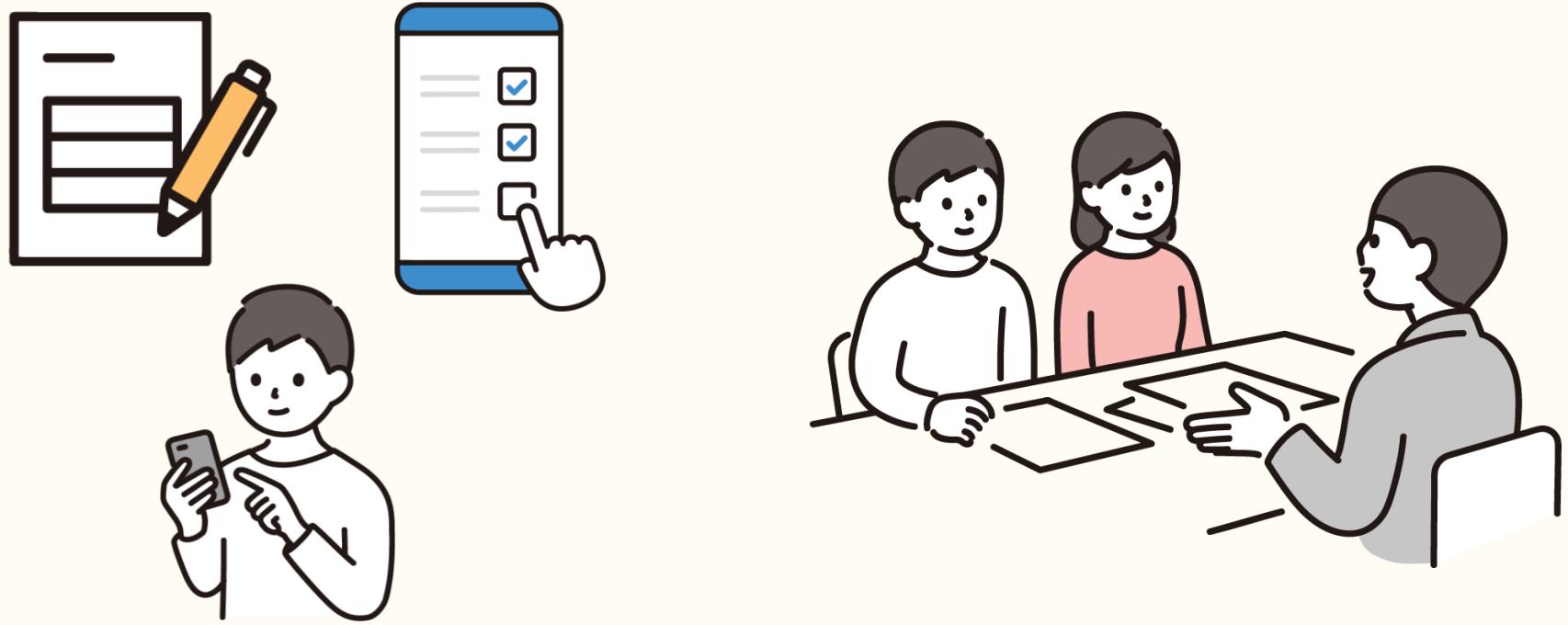


不登校の低年齢化に関する実態調査

調査報告書



東京都子供政策連携室

目次

第1章：不登校の低年齢化に関する実態調査 調査結果 概要版	P3～P10
「不登校の低年齢化に関する実態調査」の概要	P4
調査結果の概要	P5～10
第2章：不登校の低年齢化に関する実態調査 定量調査 詳細版	P11～P38
定量調査について	P13
調査結果	P14～38
第3章：不登校の低年齢化に関する実態調査 定性調査 詳細版	P39～P59
定性調査について	P41
調査結果	P42～59

※調査結果の分析のため、不登校の要因を子供、保護者・家庭、環境に関する要因等として分類しているが、
不登校の要因は複合的であり、子供・家庭等に原因を特定しているものではない。

不登校の低年齢化に関する実態調査

調査結果

概要版

「不登校の低年齢化に関する実態調査」の概要

- ✓ 小学校1年生の不登校者数の増加率（2019年と2023年を比較）は**4.07倍**となり、不登校児童・生徒の低年齢化の傾向が見られた
- ✓ 都は令和7年度、不登校の**低年齢化の実態**に即した支援策の検討に活かすため、**実態調査**を実施
- ✓ アンケート調査とヒアリング調査を実施し、**不登校の低年齢化の要因**を分析

不登校児童生徒数（都内）			
	2019年度	2023年度	
小学校1年生	246人	1,002人	4.07倍
小学校3年生	722人	1,884人	2.61倍
小学校6年生	1,702人	3,755人	2.21倍
中学校1年生	3,365人	5,580人	1.66倍
中学校3年生	4,635人	7,641人	1.65倍

(資料) 東京都教育委員会「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」及び
東京都生活文化スポーツ局「都内私立学校の児童生徒の問題行動・不登校等の実態」を基に作成

アンケート調査（定量調査）

① 調査対象

都内小学校1年生・3年生・6年生の児童・保護者 各学年3,000世帯 計9,000世帯
⇒ 全4,161世帯から回答

<質問例>

児童：学校の勉強は分かるか
保護者：コロナ禍に伴う意識の変化 など

② 調査概要

学校生活や家庭生活の状況等についてアンケート

ヒアリング調査（定性調査）

① 調査対象

ア 学びの多様化学校、教育支援センター、フリースクール等にいる児童 204名
イ 区市町村の教育支援センター支援者等 40団体

<質問例>

児童：学校で苦手だったこと
支援者：現場で感じる低年齢化の要因 など

② 調査概要

不登校の理由や低年齢化の要因等についてヒアリング

調査結果の概要

(1) 小1の不登校児童の状況

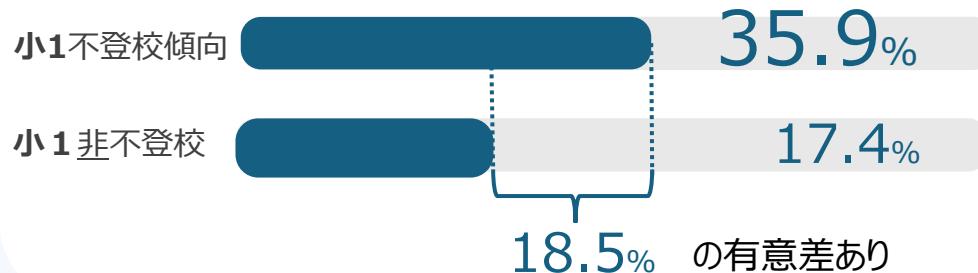
※不登校傾向：学校に行っていない、または登校渋りの様子が見られる子供

※非不登校傾向：上記以外

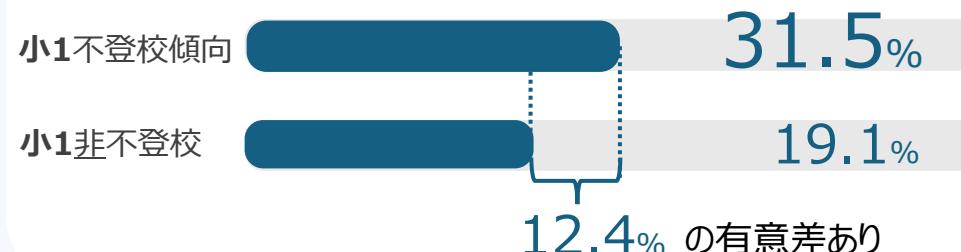
アンケート
(子供)

✓ 不登校児童ほど「登校時間が楽しくない」・「デジタルデバイスの使用時間が長い」等の傾向

朝、学校に行くまでの時間を「あまり楽しくない」・ 「全然楽しくない」と答えた割合



ゲームをしたり、YouTube等を視聴する時間 を「1日2時間以上する」と答えた割合



※なお、学年が上がるほど「登校時間が楽しくない」・「デジタルデバイスの使用時間が長い」傾向となっている

✓ 小1の不登校要因として、「勉強」や「担任の先生」等の影響は他学年に比べ少ない

担任の先生が「すごく好き」・「少し好き」と答えた割合



勉強は「すごく楽しい」・「少し楽しい」を選んだ割合



※友人関係についても、不登校要因への影響は少ない傾向が見られた

- ✓ 子供たちが学校で苦手と感じることは多岐にわたる

学校で苦手だったこと（選択肢を提示した上で、複数回答形式）

勉強をする
(102人 (50%))

【主な声】

自分で勉強するのはいいけど授業が嫌

人が多かった・うるさい
(80人 (39%))

【主な声】

以前いたクラスはうるさかった

友達にはかにされた・いじめられた
(74人 (36%))

【主な声】

自分はバカにされてないけど苦手

○その他の項目の回答

- ・話を聞く (66人 (32%))
- ・約束や時間を守る (63人 (31%))
- ・給食を食べる、休み時間 (52人 (25%))
- ・朝起きられない (47人 (23%))
- ・音や光がつらい (37人 (18%)) 等

支援者の声

- ✓ 入学後に**幼保とのギャップ**を感じてなじめない子供が存在
 ✓ 発達障害や環境変化が影響しているとの見解もあり

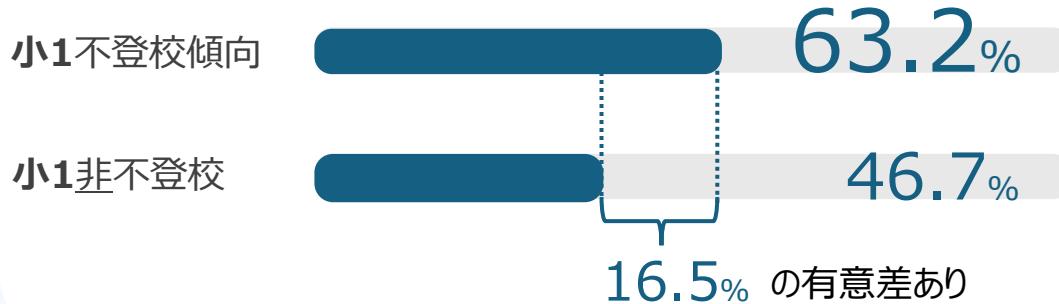
- ・保育所では自分の好きなことをしていたため、**小学校の決められたカリキュラムに慣れない子供が存在**
- ・小1の1学期で**集団生活が難しい**と感じ、「合わない」と表出する子供が増えている印象がある
- ・低学年では**発達障害 (ASD・ADHDなど)** の診断が**不登校の理由に含まれる**ケースもある
- ・**幼稚園・保育園からの環境の違い**により、急な集団環境への変化に適応できない

(2) 小1の不登校児童の保護者の状況

- ✓ 不登校傾向の小1児童を持つ保護者の約6割が、入学前から不安を抱えており、他学年と比較して最も割合が高い

アンケート
(保護者)

小学校入学前から、学校生活にはじめるか心配や不安を抱えている割合



特に小1で不安に感じている割合が高い



支援者の声

ヒアリング

- ✓ 幼保小の円滑な接続に向けた、行政から保護者への更なる情報提供が必要

- ・ 家庭での入学準備に関する情報や、低学年向けの子育て情報について、情報提供が一元的でない状況
- ・ 幼稚園や保育所等は家庭支援につなげやすい場であり、幼保の段階で、保護者に「困ったら相談してよい」という意識づけを行うことが大切

■ コロナ禍を機に保護者の意識が変化し、「学校を休ませる」ことへの抵抗感が減った

- ✓ 約半数の保護者がコロナの影響に伴い「無理やり学校に行かせなくてもよい」と思うようになった」と回答

アンケート
(保護者)

コロナ前と比較し、子供を無理に学校に行かせなくてもいいと思うようになった割合

小1の不登校傾向家庭と非不登校家庭の比較

小1不登校傾向

46.8%

小1非不登校

48.0%

支援者の声

ヒアリング

- ✓ コロナ禍を機に、「子供の意思の尊重」・「多様な学びの場の選択」という面でも保護者の意識・価値観が変化

- ・ 登校させることが重要という価値観ではなく、子供の意思を尊重する価値観に変化
- ・ テレワークにより、子供が休んでも仕事に支障が出にくくなった
- ・ 学校ではなく、多様な学びの場を選択する保護者が増えた
(今的小1の保護者のほうが、上の世代よりも「無理ならフリースクールや家庭でもよい」と考える傾向が強いという印象)
- ・ 心身の健康が最優先という価値観から、子供の思いを大事にしたいと考える保護者が増加
- ・ 兄弟が不登校の場合、本人も不登校になるケースが多い

(3) 小1の不登校児童を受け入れるための体制

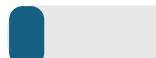
- ✓ 小1段階では、**母子分離への不安**を感じる家庭が多い状況

アンケート
(保護者)

「子供が離れたがらない」と回答した保護者 (複数回答)

小1不登校傾向  19.7%

小3不登校傾向  9.5%

小6不登校傾向  3.0%

主な回答 (保護者向けアンケート自由回答より)

- ・母子分離不安があり、7月上旬頃から不登校気味になった (小1)
- ・**保護者と離れたがらず**、家で母といたがる (小1)

支援者の声

ヒアリング

- ✓ 児童一人ひとりの状況に応じた対応が必要

- ・小学校で校内別室や適応指導教室の整備が進めば、学校で過ごせる子供が増える可能性がある
- ・低学年の子供を受け入れるには、集団指導よりも**子供一人一人の状況に応じた個別対応**が必要となる

不登校傾向の子供たちの声

※学びの多様化学校、教育支援センター、フリースクールにいる児童204人にヒアリング

- ✓ 先生に対して苦手意識があると不登校になる傾向

- ・2年生の**先生は厳しく**ていやになった。1年生の先生はいい先生だったけど、産休で変わっちゃった
- ・**担任ではなく**、図工とか音楽の先生と合わなかつた。

- 不登校傾向の家庭とそうでない家庭との比較を行うため、アンケート調査によって保護者と子供にそれぞれ出席状況や登校意欲に関する質問を行い、回答に応じて**不登校傾向・非不登校傾向**に分類（右記参照）
- 当初、子供が不登校傾向と回答した場合、保護者も同様に不登校傾向と回答する（保護者と子供の認識が一致する）と想定していたが、**保護者と子供の不登校傾向の認識に相違があるケースがみられた**

Q : (子供は) 学校に行きたくないと思っていますか？

子供に登校渋り
はない



認識の差

本当は学校行き
たくないなあ

認識差の検証

分類①：子供と保護者の回答共に、不登校傾向に分類された世帯

分類②：子供の回答には不登校傾向がみられたが、保護者は子供が不登校傾向と認識していない世帯

分類③：子供の回答には不登校傾向がみられないが、保護者は子供が不登校傾向と認識している世帯

分類④：子供と保護者の回答共に、非不登校傾向に分類された世帯

【参考：不登校傾向の定義方法】

・保護者

- 子供の登校頻度が「週4日以下」と回答した場合、**不登校傾向（不登校）**とする
- 子供の登校頻度を「ほとんど毎日通っている」と回答した内、「子供に登校渋りの様子が見られることがある」と回答した場合、**不登校傾向**とする
→保護者については、①と②の合算を不登校傾向と定義

・子供

登校意欲の設問で、「学校に行きたくないことがある」の回答を**不登校傾向（不登校・登校渋り）**と定義

⇒以上の分類を基に、保護者・子供の設問ごとにクロス分析を実施

		保護者の回答		合計
		不登校傾向 に分類	非不登校傾 向に分類	
子供 の 回答	不登校傾向 に分類	① 513	② 1,156	1,669
	非不登校傾 向に分類	③ 147	④ 2,302	2,449
合計		660	3,458	4,118

※小数点第二位切上げ

□ :保護者と子供の認識に相違があった分類

保護者と子供の間に、**不登校・登校渋りに対する認識の差**が生じている回答が**全体の約3割**

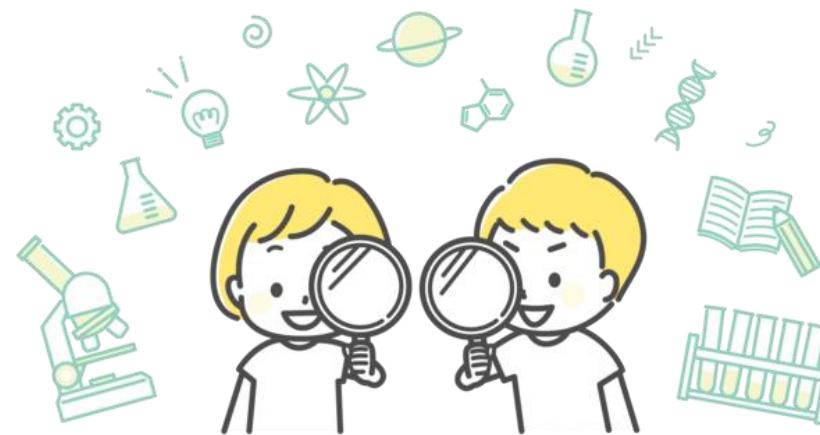
- 子供の登校渋りのサインに保護者が気づいていない、子供が親に学校に行きたくないことを伝えられていない可能性が示唆
- 保護者が子供の登校渋りについて、過度に心配や不安を抱えている可能性が示唆



不登校の低年齢化に関する実態調査

定量調査

詳細版



INDEX

0 1

定量調査について

0 2

調査結果

～類似設問への回答比較・分析～

0 3

調査結果

～個別の回答分析～

0 4

参考資料

定量調査について

<調査対象>

- | | |
|---------|---------------------------------|
| ① 調査地域 | 東京都全域 |
| ② 調査対象 | 小学校1年生、小学校3年生、小学校6年生の子供とその保護者 |
| ③ 標本サイズ | 9,000世帯 |
| ④ 抽出方法 | 住民基本台帳に基づく層化二段無作為抽出法※ |
| ⑤ 調査方法 | 郵送法（郵送配布・郵送回収、WEB（インターネット）回答併用） |

※行政単位と地域によって都内をブロックに分類し（層化）、各層で抽出地点を抽出（一段目）し、国勢調査における調査区域及び住民基本台帳を利用して、地点ごとに一定数のサンプル抽出（二段目）を行うもの。

<回収結果>

区分	小1		小3		小6		合計	
	子供	保護者	子供	保護者	子供	保護者	子供	保護者
発送数	3,000		3,000		3,000		9,000	9,000
有効回答数	1,371		1,413		1,377		4,161	8,322
回収率[%]	45.7		47.1		45.9		46.2	46.2

※回答数については、保護者と子供の両方から回答があったものを有効回答として集計している。

※次ページ以降の表・グラフにおいて、無回答・無効回答の場合は集計に含めていないため、設問ごとに回答数（n値）が異なる。

※また、端数処理の関係で小数点以下第2位で四捨五入し、小数第1位まで表示しているため、一部構成比と合計が一致していない。

<不登校傾向・非不登校傾向>

- 不登校傾向 : **659人 (16.0%)**
- 非不登校傾向 : **3,467人 (84.0%)**

※不登校傾向 : 学校に行っていない、または登校渋りの様子が見られる子供

※非不登校傾向 : 上記以外

※分類方法の詳細は、P35～37を参照

INDEX

0 1

定量調査について

0 2

調査結果
～類似設問への回答比較・分析～

0 3

調査結果
～個別の回答分析～

0 4

参考資料

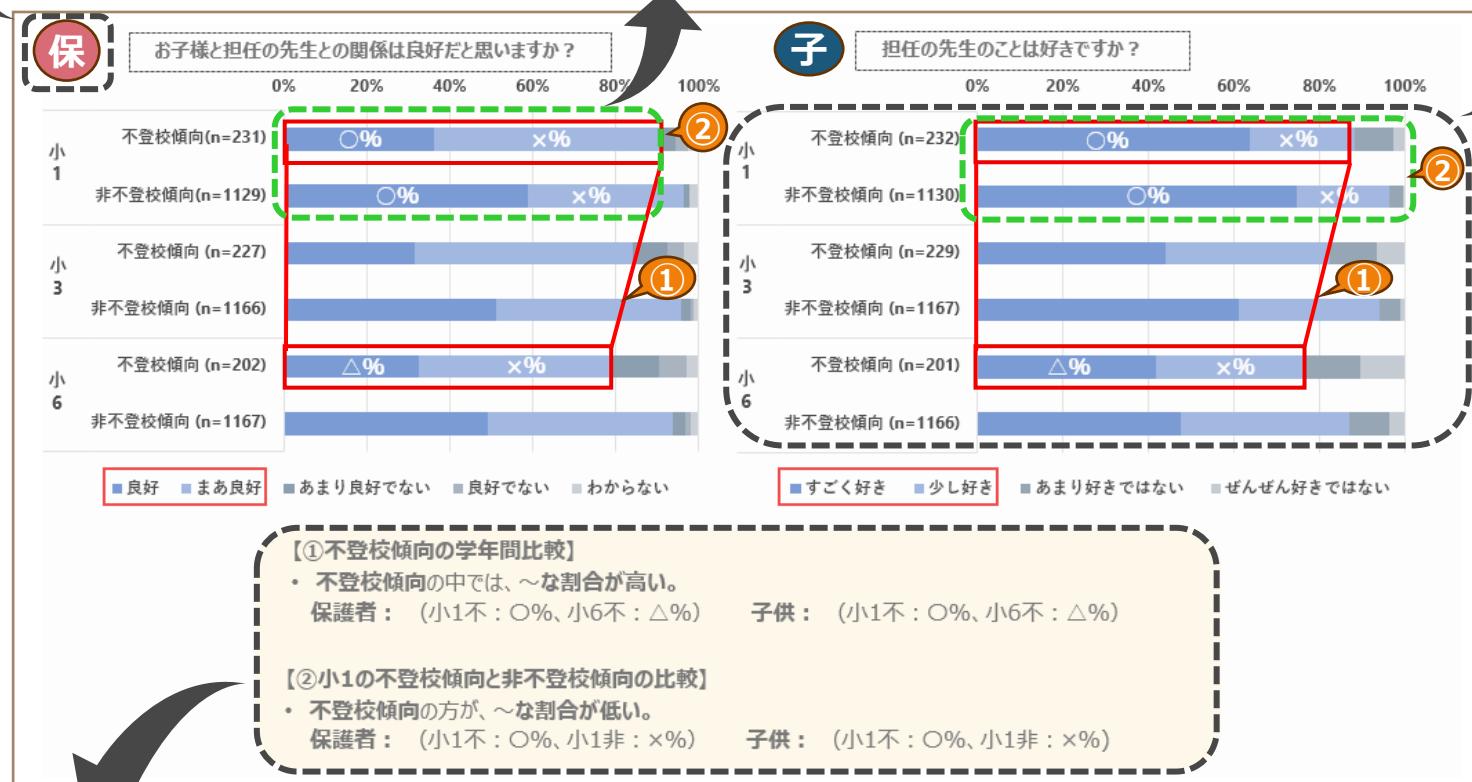
分析グラフの見方

・保護者の調査結果は 保 と表示、子供の調査結果は 子 と表示

・下記考察で触れている「学年間比較」の箇所を赤枠、
「小1の不登校/非不登校傾向間」比較を緑枠で強調

・各設問の回答結果を

- ①小1不登校傾向 ②小1非不登校傾向 ③小3不登校傾向
④小3非不登校傾向 ⑤小6不登校傾向 ⑥小6非不登校傾向
の6軸でクロス集計



・上記グラフを

①不登校傾向の学年間（小1・小3・小6）
(保護者と子供に同様の質問をしている場合、赤枠内の該当割合を併記)

②小1の不登校傾向（小1不と記載）・非不登校傾向（小1非と記載）間
(上記同様に緑枠内の該当割合を併記)

で比較して分析した内容を記載

・学年間・不登校傾向比較の分析から推察される考察を記載

※本資料の見方が、全ての資料に適用されるものではない。

※P35の分類では無効回答となったが、個別の設問への回答状況から、
不登校傾向として分析を行ったケースがある

※独立性の検定（カイ二乗検定）において、5%の有意水準で差があると
判断された場合に、「有意な差」と記載している

調査結果（類似設問への回答比較・分析）

先生との関係

保

お子様と担任の先生との関係は良好だと思いますか？

0% 20% 40% 60% 80% 100%

不登校傾向(n=231)

36.4% 54.5%

非不登校傾向(n=1129)

59.0% 37.6%

不登校傾向 (n=227)

31.7% 52.4% 8.4%

非不登校傾向 (n=1166)

51.2% 44.5%

不登校傾向 (n=202)

32.7% 46.0% 11.9% 6.4%

非不登校傾向 (n=1167)

49.4% 44.5%

■ 良好 ■ まあ良好

■ あまり良好でない ■ 良好でない ■ わからない

子

担任の先生のことは好きですか？

0% 20% 40% 60% 80% 100%

不登校傾向 (n=232)

63.8% 24.6%

9.1%

非不登校傾向 (n=1130)

74.6% 21.9%

不登校傾向 (n=229)

44.1% 38.4% 10.9% 6.6%

非不登校傾向 (n=1167)

61.2% 33.1%

不登校傾向 (n=201)

41.8% 34.8% 12.9% 10.4%

非不登校傾向 (n=1166)

47.7% 39.4% 9.3%

■ すごく好き ■ 少し好き

■ あまり好きではない ■ ぜんぜん好きではない

【①不登校傾向の学年間比較】

- 不登校傾向の中では、保護者・子供どちらの回答でも、小1の方が他学年よりも、**先生との関係が良好な割合が高い**。（良好・まあ良好の合算）
保護者：（小1不：90.9%、小6不：78.7%） 子供：（小1不：88.4%、小6不：76.6%）

【②小1の不登校傾向と非不登校傾向の比較】

- 不登校傾向の方が、保護者・子供どちらの回答でも、**先生との関係が良好な割合が低い**。（良好・まあ良好の合算）
保護者：（小1不：90.9%、小1非：96.6%） 子供：（小1不：88.4%、小1非：96.5%）
- ただし、他学年と比較すると差は小さい。
保護者：（小1不/非の差：5.7%、小3不/非の差：11.6%、小6不/非の差：15.2%） 子供：（小1不/非の差：8.1%、小3不/非の差：11.8%、小6不/非の差：10.5%）

小1の「**先生との関係が良好であるか**」については、他学年と比較して不登校要因に占める**割合が低い**ことが示唆される

保

お子様が、スマートフォンやタブレット、ゲーム機等でゲームをしたり、YouTube等の動画を視聴する時間は、一日どのくらいですか？

0% 20% 40% 60% 80% 100%

子

スマートフォンやタブレット、ゲーム機などで、ゲームをしたり、YouTubeなどの動画を見る時間は1日どのくらいですか？

不登校傾向 (n=231) 27.7% 34.2% 25.5% 10.0% ②

非不登校傾向 (n=1126) 5.7% 35.9% 38.4% 14.2% 5.6% ①

不登校傾向 (n=228) 19.7% 32.0% 25.0% 19.7%

非不登校傾向 (n=1165) 29.6% 37.8% 19.1% 8.2%

不登校傾向 (n=202) 14.4% 22.3% 30.2% 31.2% ③

非不登校傾向 (n=1166) 24.5% 33.5% 21.3% 17.0%

小
1小
3小
6小
1小
3小
6

全くない

1時間未満

1時間以上～2時間未満

2時間以上～3時間未満

3時間以上

把握していない

しない

1時間未満

1時間以上～2時間未満

2時間以上～3時間未満

3時間以上

【①不登校傾向の学年間比較】

- 保護者・子供どちらの回答でも、**学年が上がるほど、デジタルデバイスに触れている時間が長い。**（1日2時間以上使用する割合を合算）
保護者：（小1不：35.5%、小6不：61.4%） **子供：**（小1不：31.5%、小6不：59.3%）

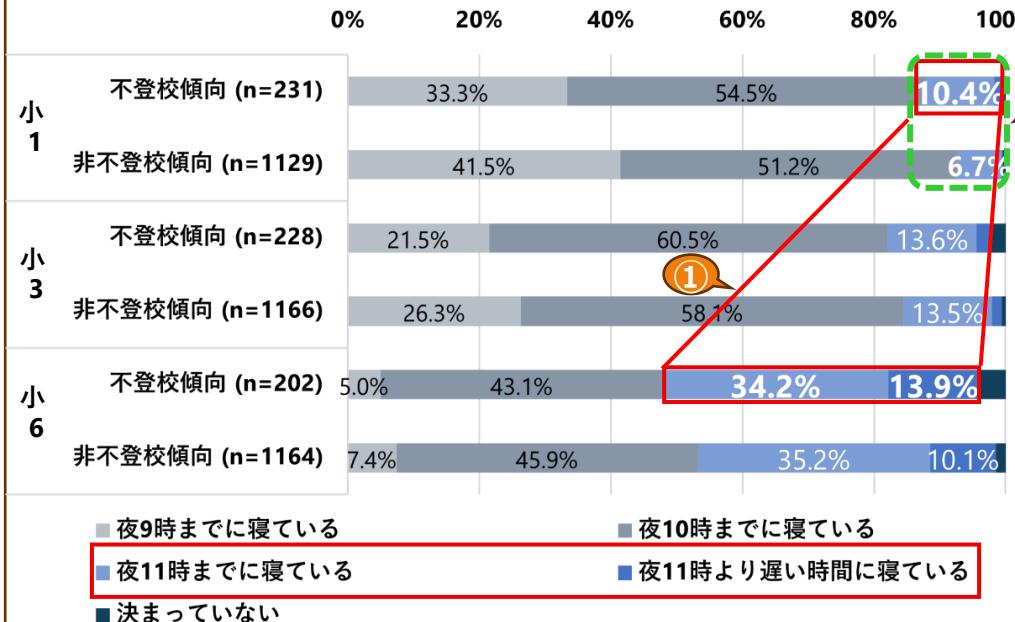
【②小1の不登校傾向と非不登校傾向の比較】

- 保護者・子供どちらの回答でも、**不登校傾向の方が、デジタルデバイスに触れている時間が長い。**（1日2時間以上使用する割合を合算）
保護者：（小1不：35.5%、小1非：19.8%） **子供：**（小1不：31.5%、小1非：19.1%）

低学年特有の要因ではないが、不登校児童ほど「デジタルデバイスの使用時間」が長い傾向が見られた

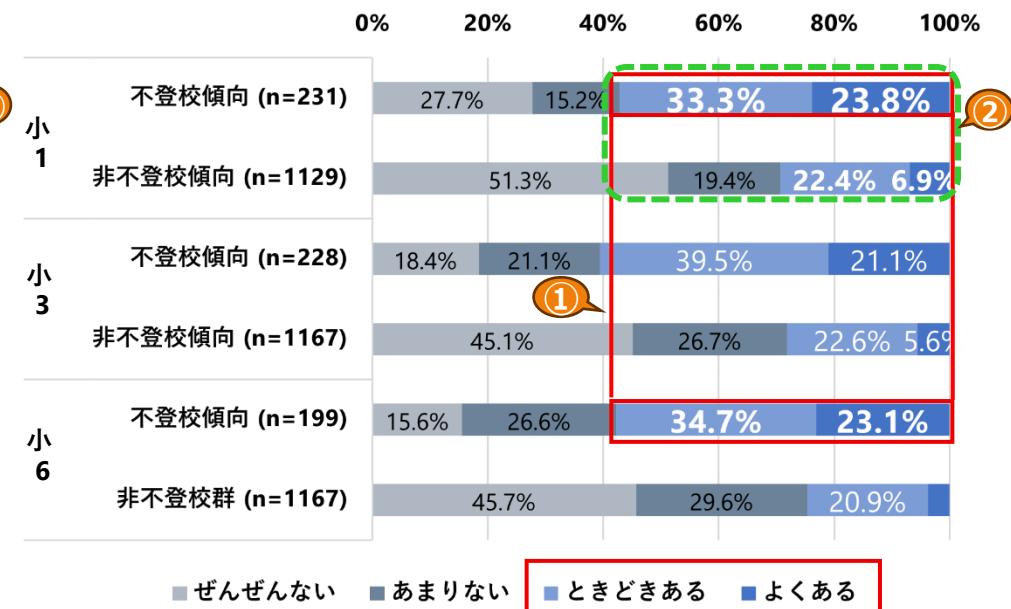
保

お子様は夜何時頃寝ていますか？



子

朝、起きたとき、つらいと思うときありますか？



【①不登校傾向の学年間比較】

- 小1は、他学年と比較して夜寝る時間が遅い割合が低い。
(夜10時以降に寝る割合を合算 小1不：11.7%、小6不：48.1%)

【②小1の不登校傾向と非不登校傾向間の比較】

- 不登校傾向の方が、寝る時間が遅い割合が高い。
(夜10時以降に寝る割合を合算 小1不：11.7%、小1非：6.9%)

【①不登校傾向の学年間比較】

- 学年の違いによる有意差なし。(ときどきある、よくあるの合算)
(小1不：57.1%、小6不：57.8%)

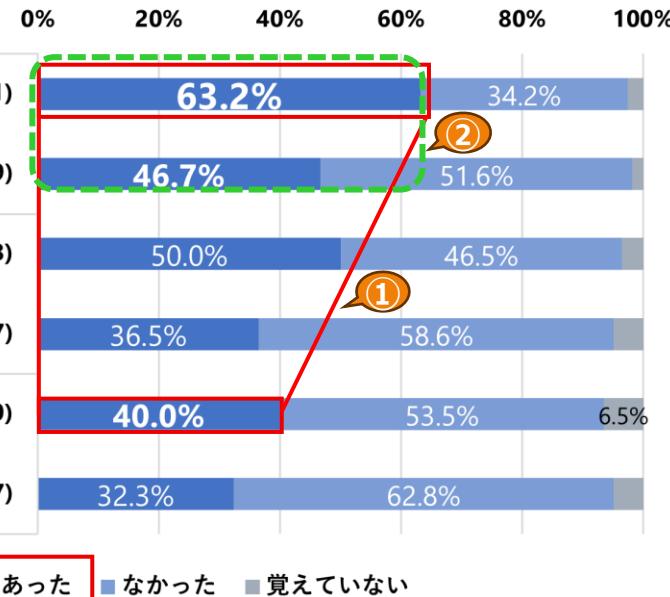
【②小1の不登校傾向と非不登校傾向間の比較】

- 不登校傾向の方が、朝がつらいと回答した割合が大幅に高い。
(ときどきある、よくあるの合算 小1不：57.1%、小1非：29.3%)

- 小1は、「夜寝る時間」が他学年と比較して早いが、「朝起きたときにつらい」と感じる割合は、他学年と同様に6割程度となっている
- 「朝起きたときにつらいと感じるか」については、不登校との相関が見られた

保

小学校入学前に「学校生活になじめないのではないか」と心配や不安に思っていたことはありましたか。



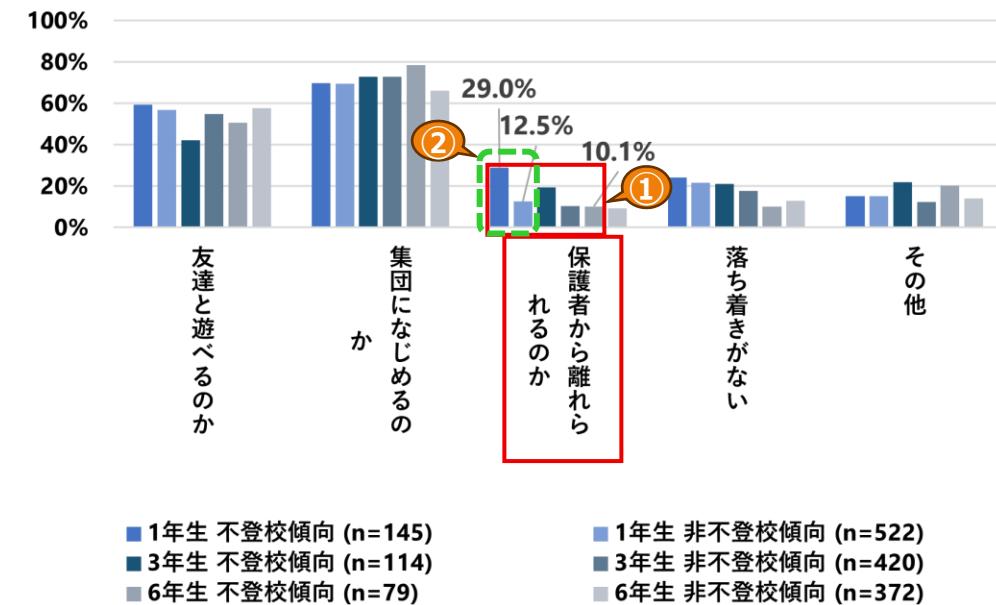
小1

小3

小6

保

小学校入学前に心配や不安に思っていたのはどのようなことでしたか。すべて選択してください



【①不登校傾向の学年間比較】

- ・ 小1は、他学年と比較して小学校入学前に心配事があった割合が高い。(小1不 : 63.2%、小6不 : 40.0%)

【②小1の不登校傾向と非不登校傾向間の比較】

- ・ 不登校傾向の方が、心配事があった割合が高い。小1はその傾向が顕著にみられる。(小1不 : 63.2%、小1非 : 46.7%)

【①不登校傾向の学年間比較】

- ・ 小1は、他学年と比較して「保護者から離れられるのか」に心配事があつた割合が高い。(小1不 : 29.0%、小6不 : 10.1%)

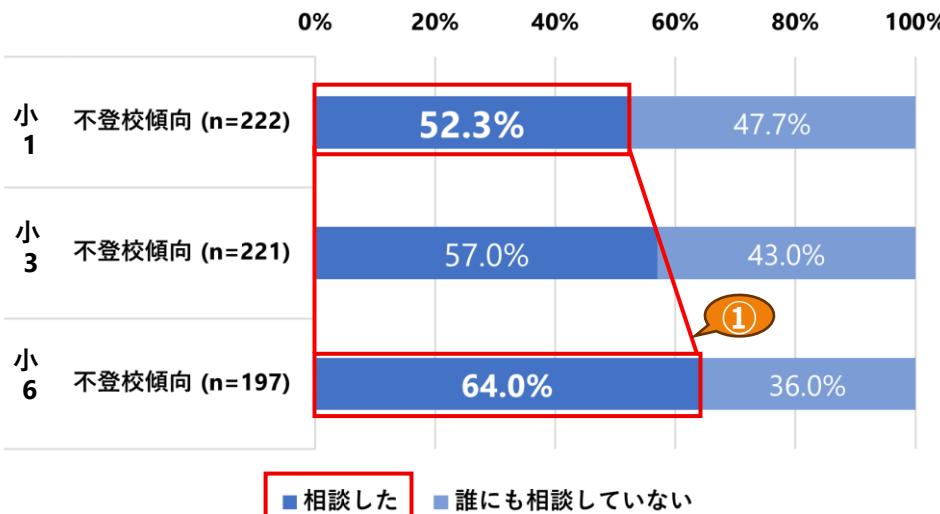
【②小1の不登校傾向と非不登校傾向間の比較】

- ・ 小1は不登校傾向の方が、非不登校傾向より「保護者から離れられるのか」という心配事があつた割合が高い。(小1不 : 29.0%、小1非 : 12.5%)

- ・ 不登校傾向の小1児童を持つ保護者の6割以上が入学前から学校になじめるか不安を抱えており、他学年と比較して最も割合が高い
- ・ 小1の特徴として「保護者との分離不安」について、不登校との関連性が高いことが示唆される

保

学校への欠席や登校渋りが多いことについて、誰かに相談しましたか。



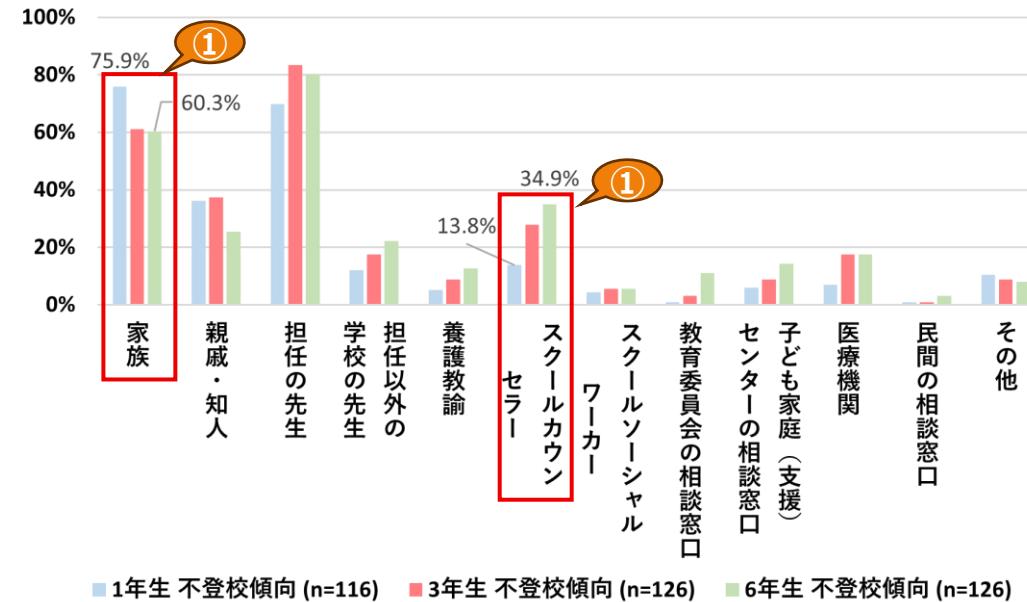
【①不登校傾向の学年間比較】

- 小1は他学年と比較して、欠席や登校渋りについて相談した割合が低い。
(小1不 : 52.3%、小6不 : 64.0%)

※不登校傾向への設問のため、非不登校傾向との比較なし。

保

相談した先を全て教えてください。(複数選択)



【①不登校傾向の学年間比較】

- 小1は「家族」に相談した割合が高く、(小1不 : 75.9%、小6不 : 60.3%)「スクールカウンセラー」に相談した割合が低い。
(小1不 : 13.8%、小6不 : 34.9%)

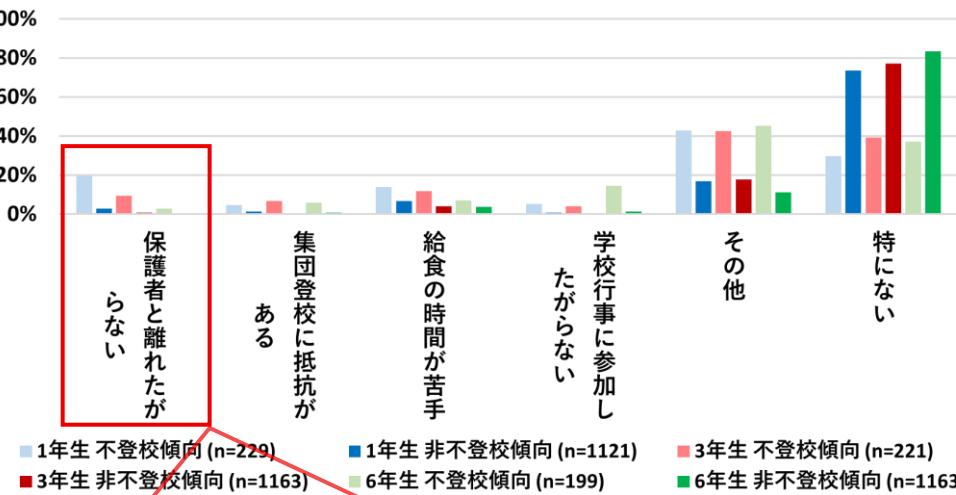
※不登校傾向への設問のため、非不登校傾向との比較なし。

小1の保護者は、子供が登校渋りになっても、身近な家族への相談に留まり、相談窓口や機関に繋がっていない可能性が高いことが示唆される

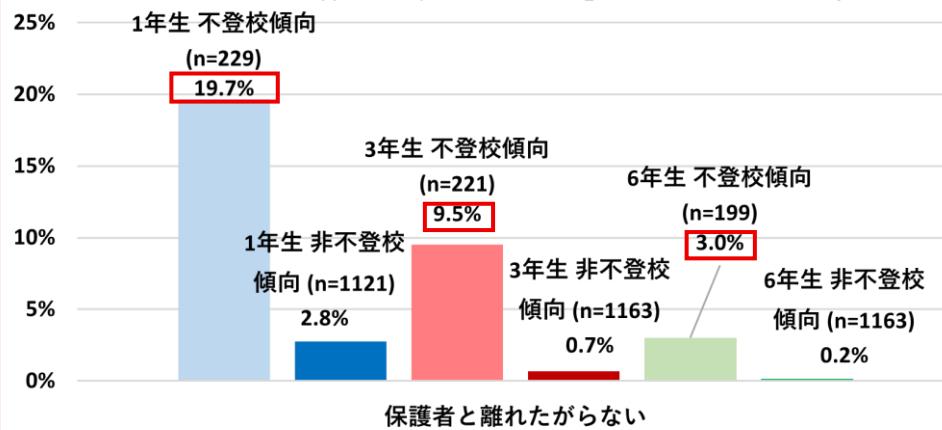
保護者との分離不安

保

お子様の学校生活での様子について、心配や不安なことはありますか。
(複数回答)



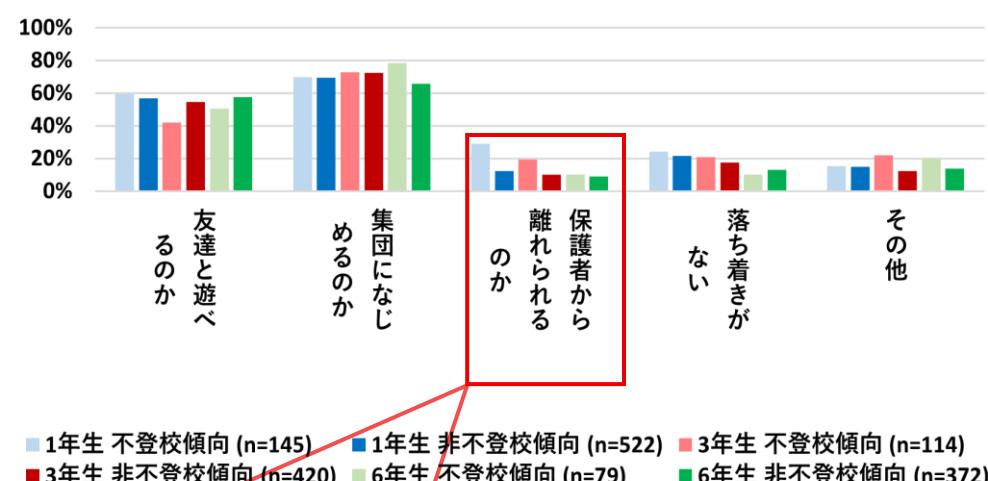
(選択肢「保護者と離れたがらない」の回答比率のみ抜粋)



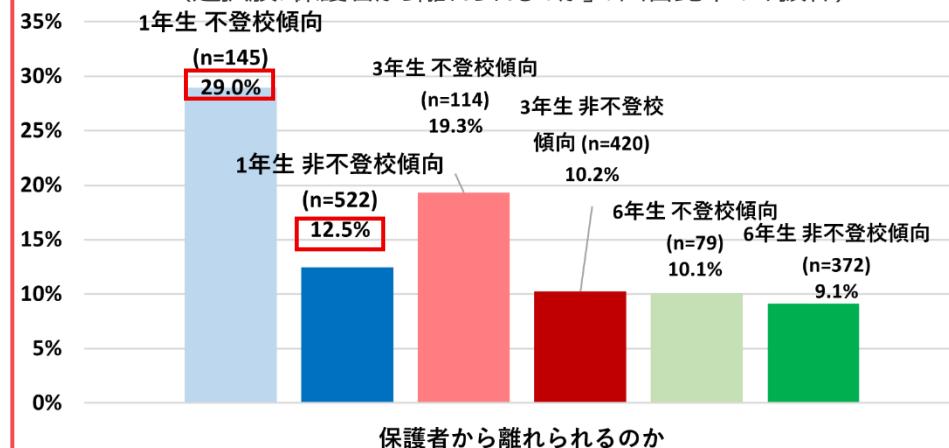
- 不登校傾向において、**小1の保護者は「保護者と離れたがらない」の選択肢を選んだ割合（19.7%）が、他学年（小3：9.5%、小6：3.0%）と比較して高い。**

保

小学校入学前に、心配や不安に思っていたのはどのようなことでしたか。
(複数回答) ※再掲



(選択肢「保護者から離れられるのか」の回答比率のみ抜粋)



- 小1不登校傾向の保護者は、「保護者から離れられるのか」の選択肢を選んだ割合（29.0%）が、小1非不登校傾向（12.5%）と比較して高い。**

INDEX

0 1

定量調査について

0 2

調査結果

～類似設問への回答比較・分析～

0 3

調査結果

～個別の回答分析～

0 4

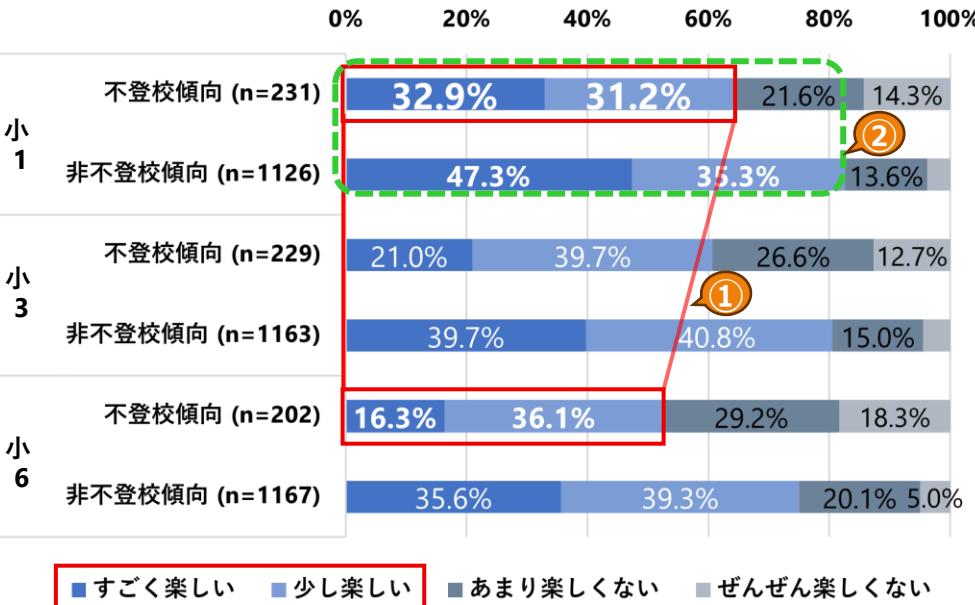
参考資料

調査結果（個別の回答分析：子供）

登校時間

子

朝、学校に行くまでの時間（登校時間）は楽しいですか？



【①不登校傾向の学年間比較】

- 学年が上がるほど、楽しいと回答した割合は低くなる。
(すごく楽しい、少し楽しいの合算 小1不：64.1%、小6不：52.4%)

【②小1の不登校傾向と非不登校傾向間の比較】

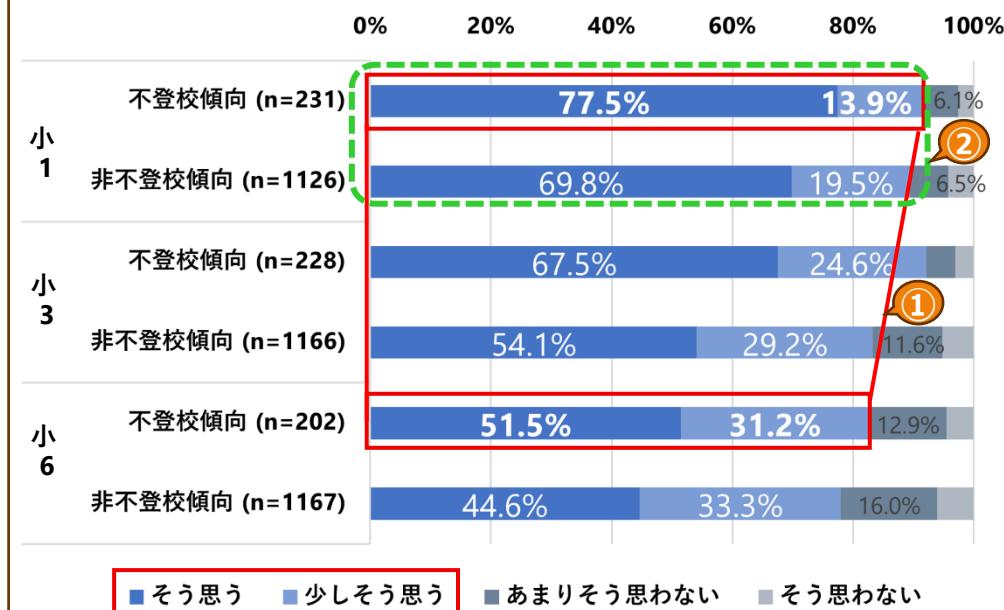
- 不登校傾向の方が、楽しいと回答した割合が低い。
(すごく楽しい、少し楽しいの合算 小1不：64.1%、小1非：82.6%)

小1は、他学年と比較して、朝の登校時間が楽しいと感じている割合が高い

学校生活

子

学校はやることがいっぱいあると思いますか？



【①不登校傾向の学年間比較】

- 学年が上がるほど、やることがいっぱいあると感じている割合は低くなる。
(そう思う、少しそう思うの合算 小1：91.4%、小6：82.7%)

【②小1の不登校傾向と非不登校傾向間の比較】

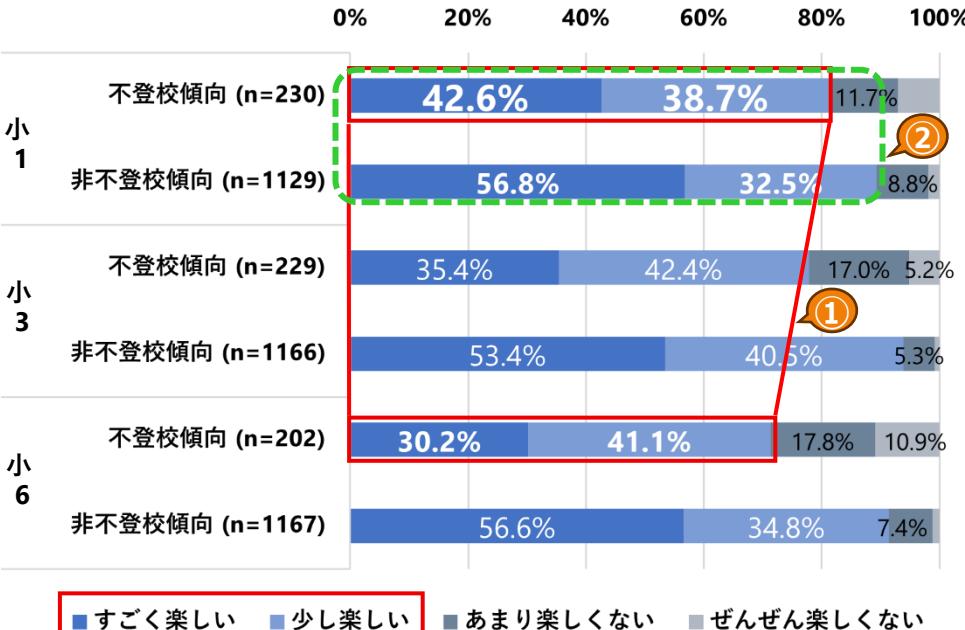
- 不登校傾向の方が、やることがいっぱいあると回答した割合が高いが、大きな差はみられない。
(そう思う、少しそう思うの合算 小1不：91.4%、小1非：89.3%)

小1は、不登校傾向の有無に関わらず、学校でやることがいっぱいあると思う割合が高い

学校での勉強

子

学校でクラスの人たちと勉強するのは楽しいですか？



【①不登校傾向の学年間比較】

- 小1は、他学年と比較してクラスの人と勉強するのは楽しいと回答した割合が高い。（すごく楽しい、少し楽しいの合算 小1：81.3%、小6：71.3%）

【②小1の不登校傾向と非不登校傾向間の比較】

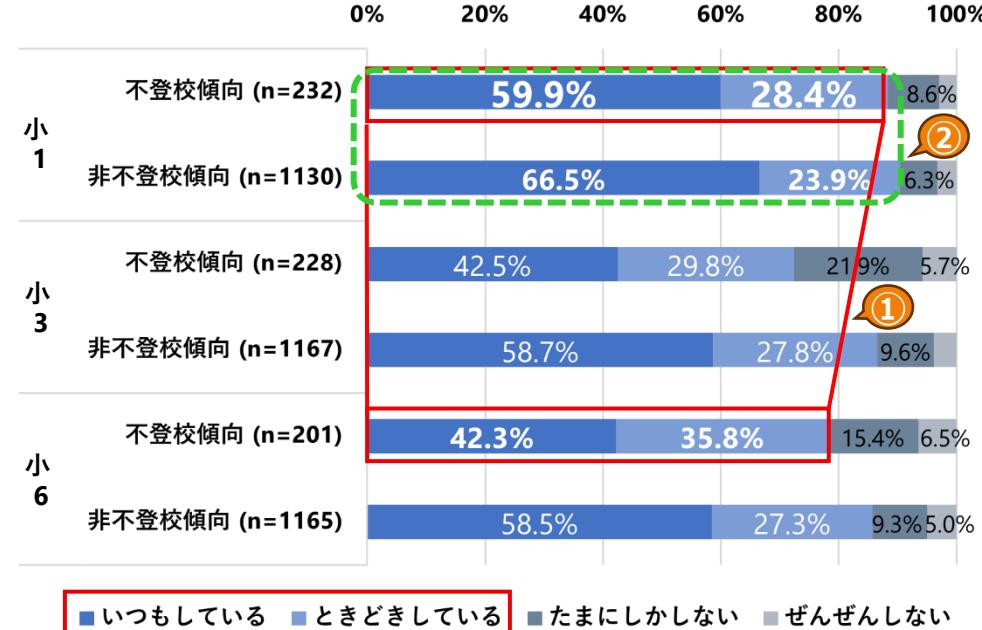
- 不登校傾向の方が、クラスの人と勉強するのは楽しいと回答した割合が低い。（すごく楽しい、少し楽しいの合算 小1不：81.3%、小1非：89.3%）
- ただし、他学年と比較すると差は小さい。（小1不/非の差：8.0%、小3不/非の差：16.1%、小6不/非の差：20.1%）

小1は、不登校傾向の有無に関わらず、勉強を楽しいと感じている割合が高い

家の勉強

子

家で勉強はしていますか？



【①不登校傾向の学年間比較】

- 小1は、他学年と比較して家で勉強していると回答した割合が高い。（いつもしている、ときどきしているの合算 小1：88.3%、小6：78.1%）

【②小1の不登校傾向と非不登校傾向間の比較】

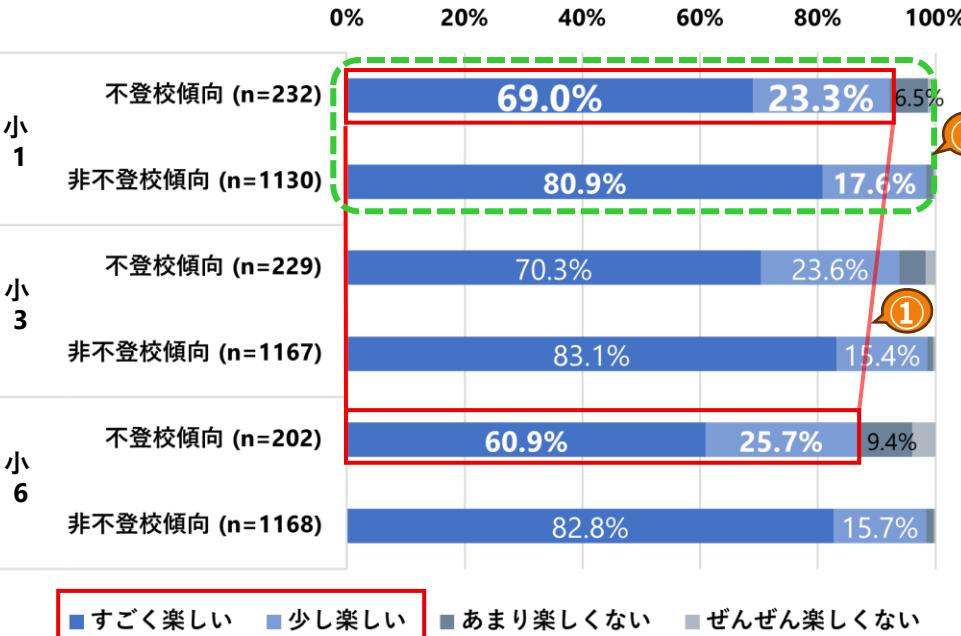
- 不登校傾向の方が、勉強をしていると回答した割合が低い。（いつもしている、ときどきしているの合算 小1不：88.3%、小1非：90.4%）
- ただし、他学年と比較すると差は小さい。（小1不/非の差：2.1%、小3不/非の差：14.2%、小6不/非の差：7.7%）

小1は、不登校傾向の有無に関わらず、家で勉強している割合が高い

友人関係

子

学校で他の子と遊ぶのは楽しいですか？



【①不登校傾向の学年間比較】

- 小1は、他学年と比較して学校で他の子と遊ぶのは楽しいと回答した割合が高い。
(すごく楽しい、少し楽しいの合算 小1不 : 92.3%、小6不 : 86.6%)

【②小1の不登校傾向と非不登校傾向間の比較】

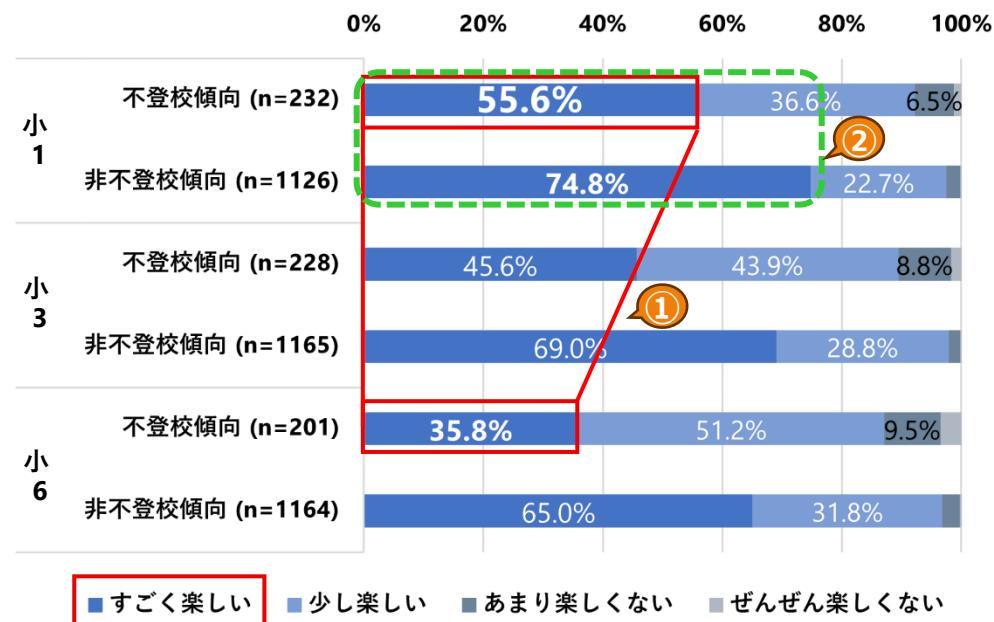
- 不登校傾向の方が、学校で他の子と遊ぶのは楽しいと回答した割合が低い。
(すごく楽しい、少し楽しいの合算 小1不 : 92.3%、小1非 : 98.5%)

小1は、不登校傾向の有無に関わらず、他の子と遊ぶのが楽しいと感じている割合が高い

幸福度

子

毎日楽しいですか？



【①不登校傾向の学年間比較】

- 学年が上がるほど、「すごく楽しい」と回答した割合は低くなる。
(小1不 : 55.6%、小6不 : 35.8%)

【②小1の不登校傾向と非不登校傾向間の比較】

- 不登校傾向の方が、「すごく楽しい」と回答した割合が低い。
- ただし、他学年と比較すると差は小さい。
(小1不/非の差 : 19.2%、小3不/非の差 : 23.4%、小6不/非の差 : 29.2%)

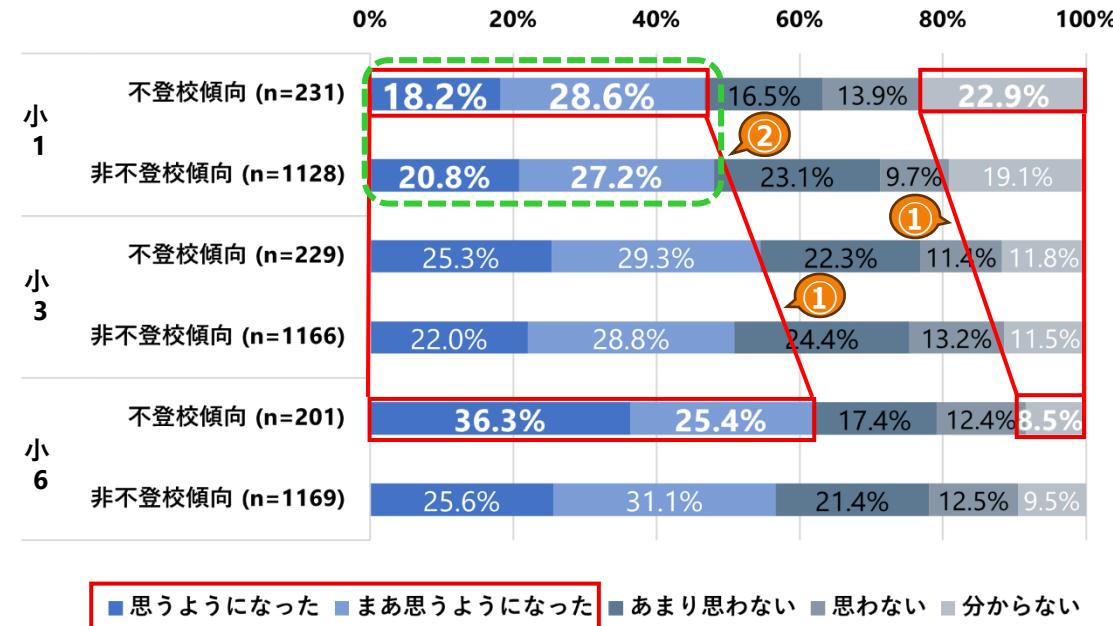
小1は、不登校傾向の有無に関わらず、毎日楽しいと思う割合が高い

調査結果（個別の回答分析：保護者）

コロナの影響による保護者の意識の変化

保

新型コロナウイルスの流行前と比べて、お子様が学校を休みたいと言ったときに、無理をさせてまで行かせなくてもよいと思うようになりましたか。



【①不登校傾向の学年間比較】

- 学年が上がるほど、行かせなくてよいと思うようになった割合が高くなる。
(思うようになった、まあ思うようになったの合算 小1不 : 46.8%、小6不 : 61.7%)
- 小1は「わからない」の割合が他の学年に比べて高い。(小1不 : 22.9%、 小6不 : 8.5%)

【②小1の不登校傾向と非不登校傾向間の比較】

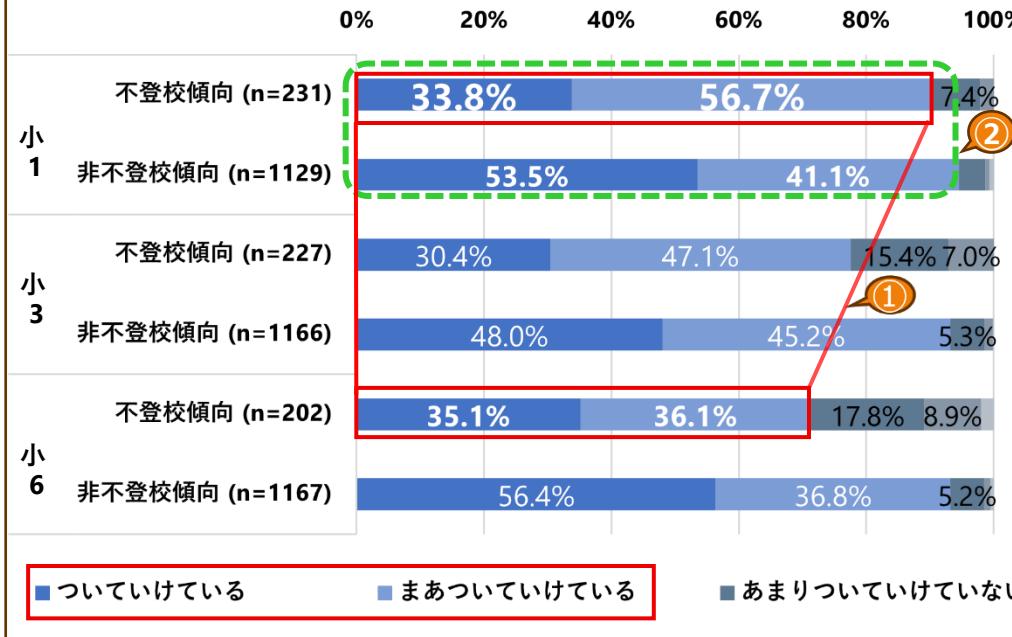
- 不登校傾向の有無による有意差なし。
(思うようになった、まあ思うようになったの合算 小1不 : 46.8%、小1非 : 48.0%)

学年により差はあるが、「コロナの影響による意識変化」により、約半数の保護者が、**子供を無理やり学校に行かせなくてもよい**と考えるようになったことが示唆される

学校の勉強

保

お子様は学校の勉強についていけていると思いますか？



【①不登校傾向の学年間比較】

- 不登校傾向の中では、小1は勉強についていっている割合が高い。
(ついていけている、まあついていけているの合算 小1不：90.5%、小6不：71.2%)

【②小1の不登校傾向と非不登校傾向間の比較】

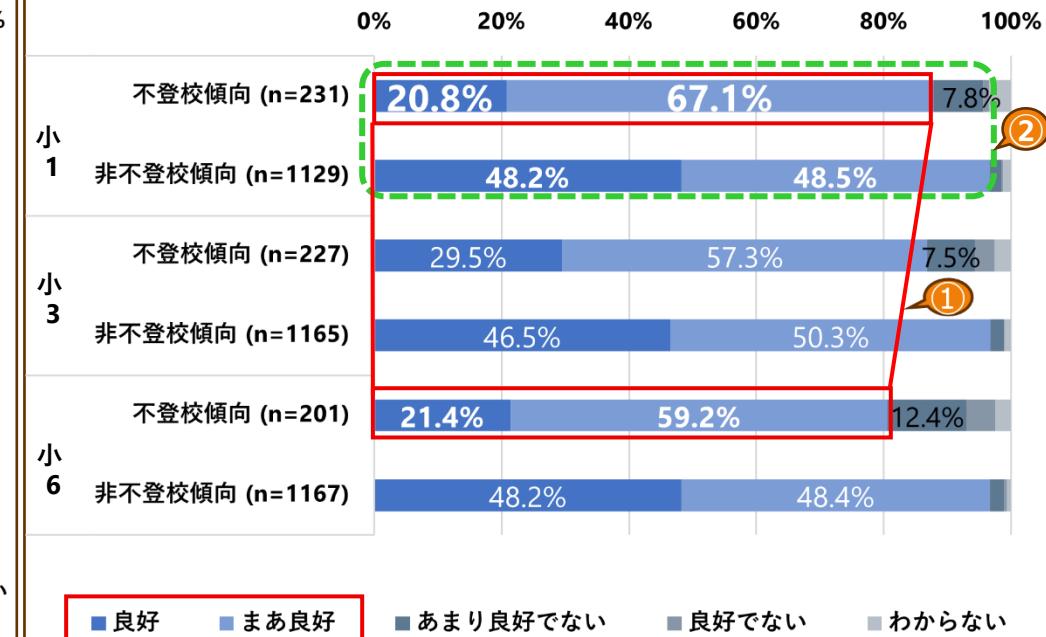
- 不登校傾向の方が、勉強についていっている割合が低い。
(ついていけている、まあついていけているの合算 小1不：90.5%、小1非：94.6%)
- ただし、他学年と比較すると差は小さい。(小1不/非の差：4.1%、小3不/非の差：15.7%、小6不/非の差：22.0%)

小1は、「学校の勉強についていっているかどうか」が、不登校に影響する可能性が低いことが示唆される

友人関係

保

お子様の友人関係は良好だと思いますか？



【①不登校傾向の学年間比較】

- 小1は、他学年と比較して友人関係が良好な割合が高い。
(良好、まあ良好の合算 小1不：87.9%、小6不：80.6%)

【②小1の不登校傾向と非不登校傾向間の比較】

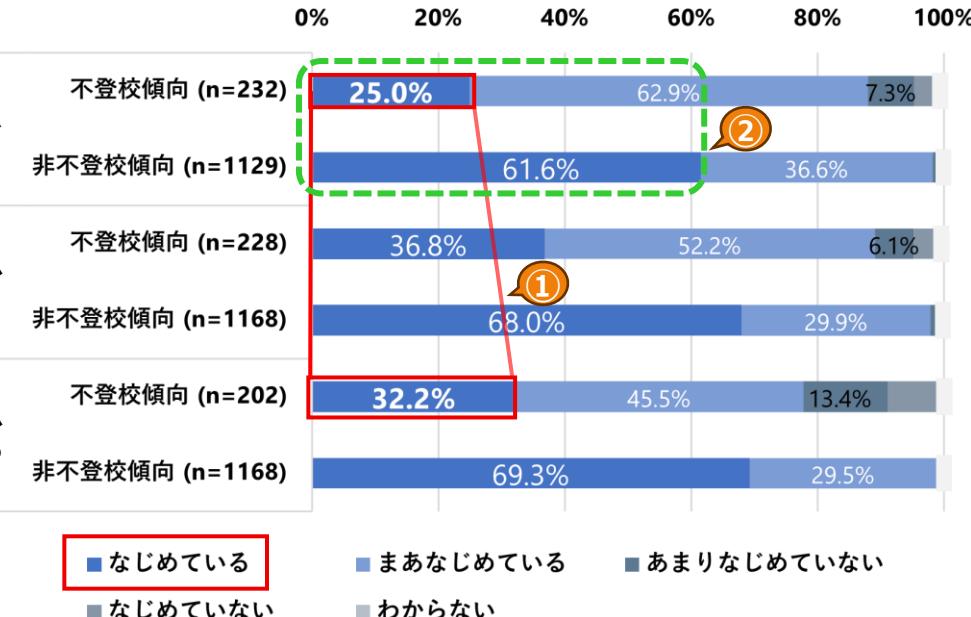
- 不登校傾向の方が、友人関係が良好な割合が低い。
(良好、まあ良好の合算 小1不：87.9%、小1非：96.7%)
- ただし、他学年と比較すると差は小さい。(小1不/非の差：8.8%、小3不/非の差：10.0%、小6不/非の差：16.0%)

小1は、「友人関係が良好か」が、不登校に影響する可能性が低いことが示唆される

集団生活への適応

保

お子様は学校での集団生活になじめていると思いますか？



【①不登校傾向の学年間比較】

- 小1は他学年と比較して、「なじめている」の割合が低い。（小1不：25.0%、小6不：32.2%）不登校傾向の中では、小6の「なじめていない」割合（32.2%）が高い。

【②小1の不登校傾向と非不登校傾向間の比較】

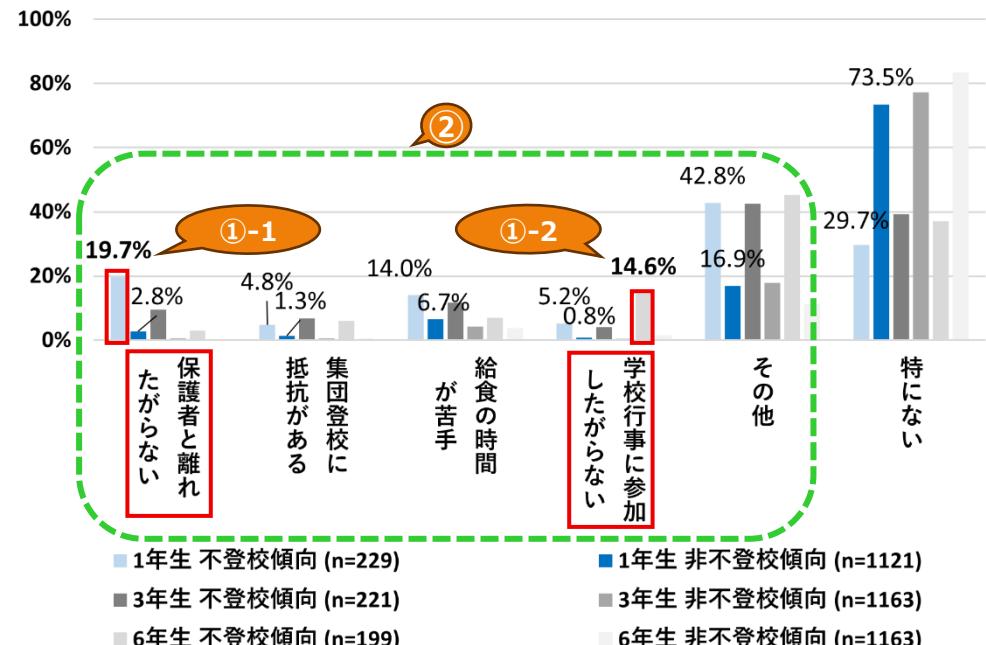
- 不登校傾向の方が、なじめている割合が大幅に低い。
(小1不：25.0%、小1非：61.6%)

小1は、「集団生活になじめているか」が、不登校に影響する可能性が高いことが示唆される

学校生活における心配や不安

保

お子様の学校生活での様子について、心配や不安なことはありますか。当てはまるものをすべて選択してください。



【①不登校傾向の学年間比較】

- 不登校傾向の中では、小1は「保護者と離れたがらない」の割合が高く（①-1：19.7%）、小6は「学校行事に参加したがらない」の割合（①-2：14.6%）が高い。

【②小1の不登校傾向と非不登校傾向間の比較】

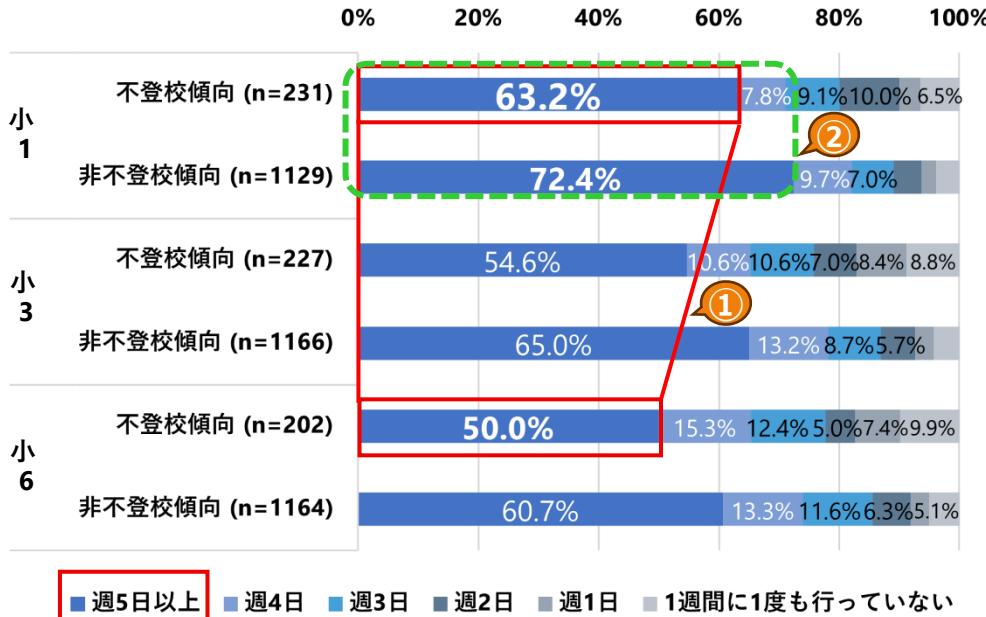
- 不登校傾向の方が何らかの心配がある割合（「特にない」以外を選択した割合）が大幅に高い。（小1不：70.3%、小1非：26.5%）

小1は、「保護者と離れたがらないか」が、不登校に影響する可能性が高いことが示唆される

自宅での学習頻度

保

自宅での学習は1週間のうち何日行っていますか。



【①不登校傾向の学年間比較】

- 学年が上がるほど、週5日以上学習を行っている割合が低くなる。
(小1不 : 63.2%、小6不 : 50.0%)

【②小1の不登校傾向と非不登校傾向間の比較】

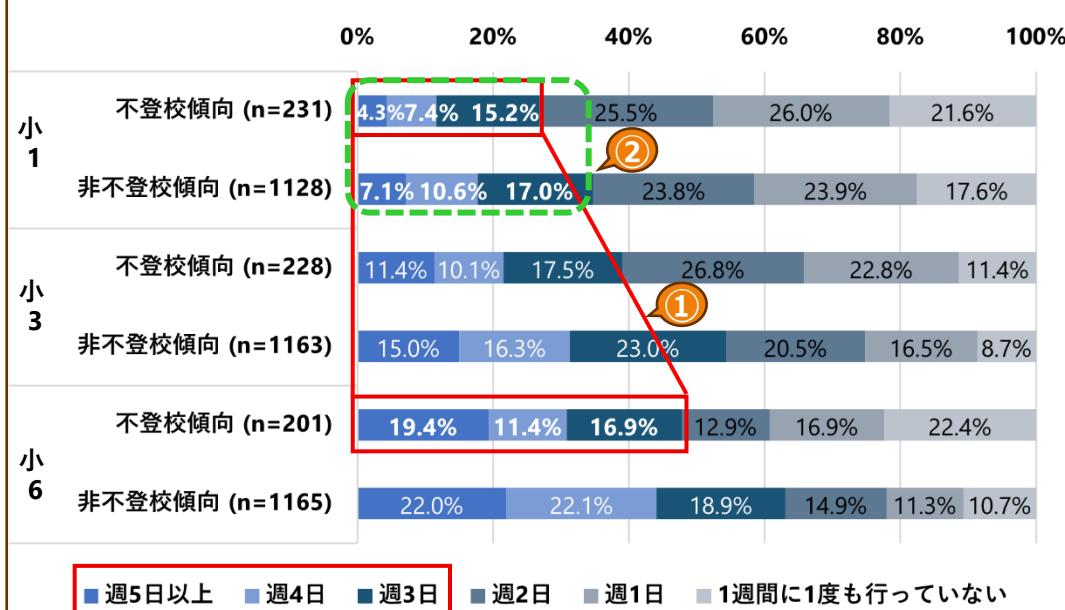
- 不登校傾向の方が、学習頻度が低い。
(週5日以上学習する割合 小1不 : 63.2%、小1非 : 72.4%)
- ただし、他学年と比較すると差は小さい。
(小1不/非の差 : 9.2%、小3不/非の差 : 10.4%、小6不/非の差 : 10.7%)

小1は、不登校傾向の有無に関わらず、「学習頻度」が高い傾向にある

習い事等の頻度

保

塾やお稽古、スポーツクラブ等へは1週間のうち何日行っていますか？



【①不登校傾向の学年間比較】

- 小1は他学年と比較して、習い事の頻度が少ない。
(習い事の頻度が週3日以上の合算 小1 : 26.9%、小6 : 47.7%)

【②小1の不登校傾向と非不登校傾向間の比較】

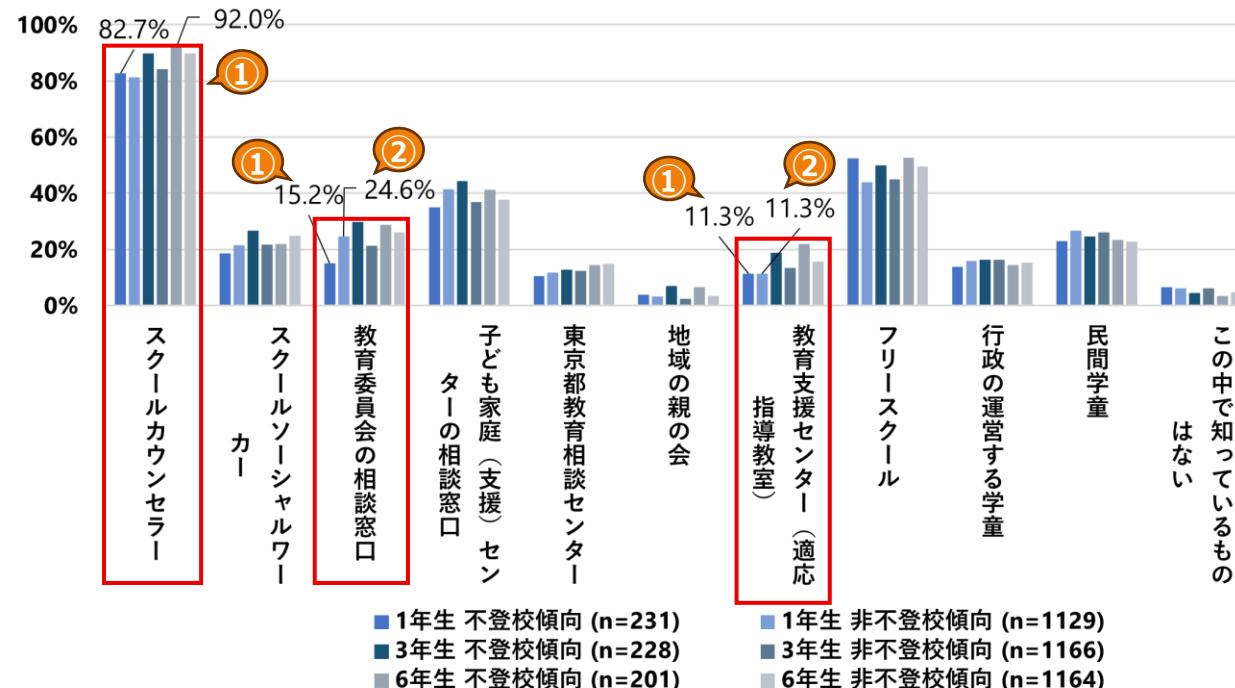
- 不登校傾向の方が、習い事の頻度が少ない。
(習い事の頻度が週3日以上の合算 小1不 : 26.9%、小1非 : 34.7%)
- ただし、他学年と比較すると差は小さい。
(小1不/非の差 : 7.8%、小3不/非の差 : 15.3%、小6不/非の差 : 15.3%)

小1は、「習い事の頻度」と不登校傾向の相関が弱いことが示唆される

支援情報の認知度

保

「不登校に関する相談先」や「学校外の学びの場・居場所」として知っているものを、すべて教えてください。
(複数選択可)



【①不登校傾向の学年間比較】

- 学年を問わず、スクールカウンセラーの認知度が高い。（小1不：82.7%、小6不：92.0%）
- 小1の不登校傾向は教育委員会の相談窓口（15.2%）や教育支援センター（11.3%）等の公的支援機関の認知度が低い。

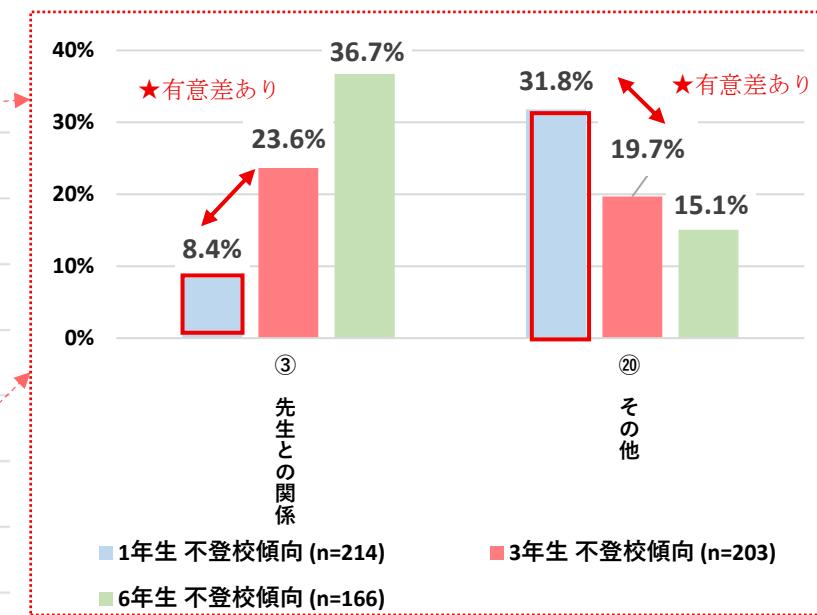
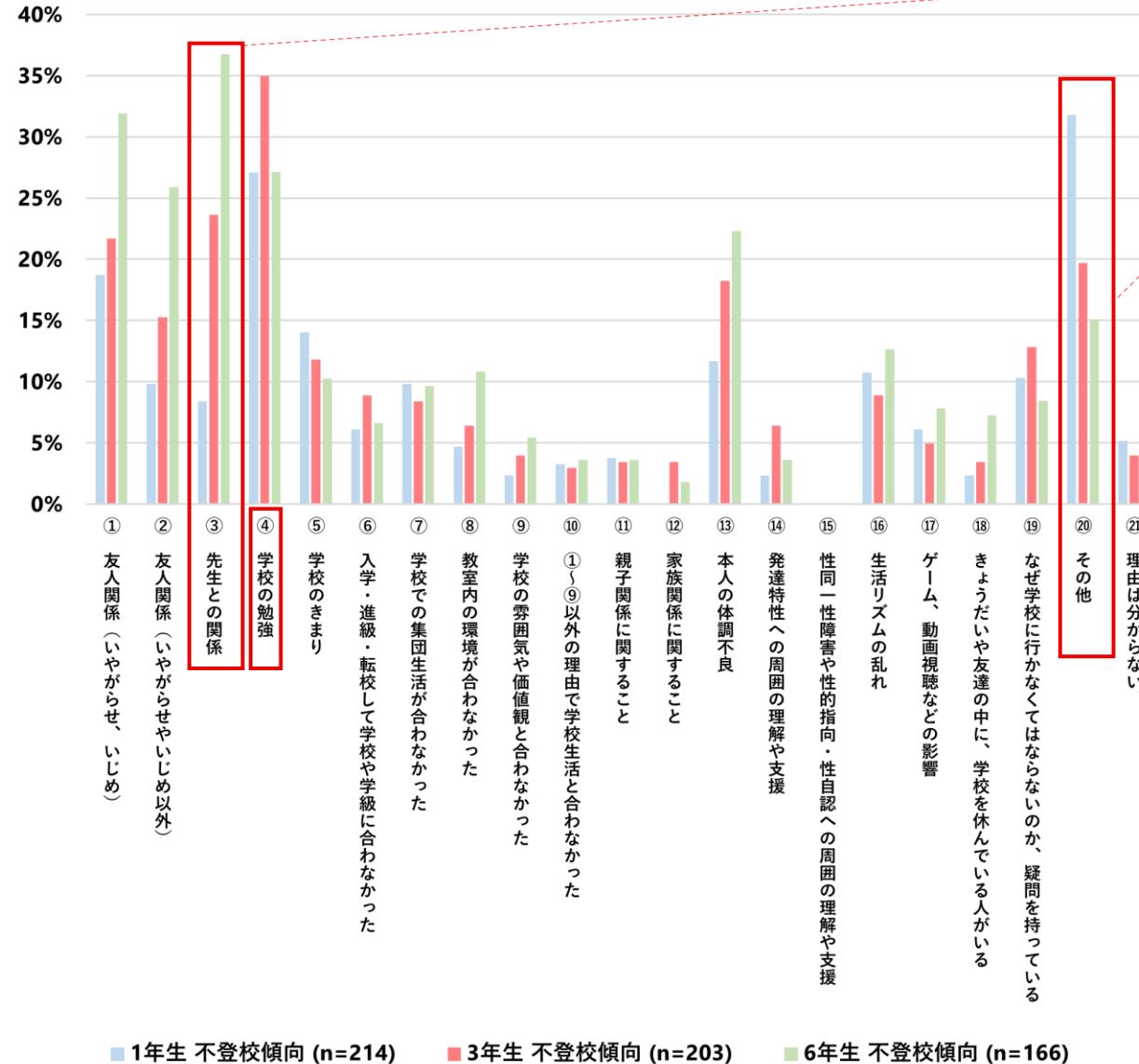
【②小1の不登校傾向と非不登校傾向間の比較】

- 不登校傾向の有無による有意差なし（教育委員会の相談窓口 小1不：15.2%、小1非：24.6%）
(教育支援センター 小1不：11.3%、小1非：11.3%)

小1の保護者は、不登校に関する公的支援機関の認知度が低く、相談先として選択され
ていない可能性が示唆される

保

登校を渋り始めた理由として考えられることを以下の選択肢からすべて教えてください。



- ✓ 小1の保護者は「先生との関係」の選択肢を選んだ割合 (8.4%) が、他学年 (小3 : 23.6%、小6 : 36.7%) と比較して低い。
- ✓ 小1の保護者が考える登校を渋り始めた理由として、「学校の勉強」の選択肢を選んだ割合 (27.1%) が最も高い。
- ✓ また、小1の保護者は「その他」の選択肢を選んだ割合 (31.8%) が、他学年 (小3 : 19.7%、小6 : 15.1%) と比較して高い。
- ✓ その他の自由記述回答で多かったのは、「保育所生活とのギャップ」「家にいたい」といった新生活への適応に関する回答だった。
- ✓ 子供が幼稚園・保育所等から小学校へ進学する際、環境の変化が大きく、学校のシステムそのものになじめなかつた可能性が示唆される。

不登校に関する悩みとその解決方法（自由意見分析）

学年	相談先	相談してよかつた理由
1	担任の先生	母親に娘の様子を伝えてくれたり、学校では娘に声がけしてくれたから。
3	担任の先生、担任以外の学校の先生、養護教諭	学校の担任や補助の先生、養護の先生などたくさんの先生が娘のことを把握してくれて、声をかけたりしてもらえたのが良かった。
3	教育委員会の相談窓口	教育相談の心理士の方に相談したことで、子供の特性にあった情緒固定学級への転校を決めるきっかけになったから。
3	スクールソーシャルワーカー	学校への要望を間に入って伝えてくれ、希望の支援を受けることができた。
6	スクールカウンセラー	月に一度の面談（親）や週に一度の面談（子供）をしていただいたうえで、その先生を通じて担任の先生だけでなく、校長先生を中心に学校全体で常にサポートしていただけた。最終的に区の適応指導教室に学びの場を移したが、現在も学校と繋がり良い関係が築けている。
6	担任の先生	子供がスクールカウンセラーへの相談や、医療機関への受診を拒否するため、担任の先生へ相談しているが、学校や家庭での様子について連携しながら、学校生活から離れ過ぎない様に常にサポートしていただいている。
6	担任の先生、担任以外の学校の先生、子ども家庭（支援）センターの相談窓口	学校の担任と学年主任 ・別室登校のセンターを利用できるように申し込みをして頂けた。校内のサポートを保護者がする時間があることを了承して頂けた。 支援センターの教育相談 ・進路について、不登校の生徒が通えるシステムがあること等、具体的なアドバイスがあり助かっている。
6	担任の先生、スクールカウンセラー	担任の先生からスクールカウンセラーを紹介していただいたことで、特性があるのではないかと分かり、発達支援教室に繋がったから。

相談先（不登校・登校渋り）	小学1年生			小学3年生			小学6年生		
	相談先	良かった相談先	(参考) 良かった数 /相談数	相談先	良かった相談先	(参考) 良かった数 /相談数	相談先	良かった相談先	(参考) 良かった数 /相談数
家族	88	10	11.4%	77	5	6.5%	76	6	7.9%
親戚・知人	42	6	14.3%	47	4	8.5%	32	6	18.8%
担任の先生	81	38	46.9%	105	47	44.8%	101	37	36.6%
担任以外の学校の先生	14	2	14.3%	22	9	40.9%	28	11	39.3%
養護教諭	6	2	33.3%	11	5	45.5%	16	4	25.0%
スクールカウンセラー	16	6	37.5%	35	13	37.1%	44	16	36.4%
スクールソーシャルワーカー	5	2	40.0%	7	3	42.9%	7	1	14.3%
教育委員会の相談窓口	1	0	0.0%	4	0	0.0%	14	6	42.9%
子ども家庭（支援）センターの相談窓口	7	4	57.1%	11	1	9.1%	18	4	22.2%
医療機関	8	2	25.0%	22	4	18.2%	22	7	31.8%
民間の相談窓口	1	0	0.0%	1	0	0.0%	4	0	0.0%
その他	12	8	-	11	6	-	10	2	-
不明	-	26	-	-	16	-	-	16	-
無回答	-	14	-	-	15	-	-	12	-
計	116	107	92.2%	126	110	87.3%	126	104	82.5%

- ✓ スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーといった専門家が入ることで、第三者からの意見が欲しい保護者のニーズに対応することができている。
- ✓ 公的な専門家が、各支援機関への橋渡しの機能を果たしている。
- ✓ 担任の先生への相談満足度はどの学年においても高い。（小1：46.9%、小3：44.8%、小6：36.6%）

入学前の悩みとその解決方法（自由意見分析）

入学前に気になった具体的な内容	相談先	相談してよかつた理由
友人とのコミュニケーションをうまくとれるか心配だった。	幼稚園や保育所等の先生	幼稚園の先生が就学支援シートについて教えてくださり、小学校へ提出することができたから。
気持ちの切り替えがうまくいかないと、行動も切り替えられず集団生活、集団行動がとれていない。	幼稚園や保育所等の先生、教育委員会の相談窓口	保育所の先生に就学相談を勧めていただき、実際に相談することで特別支援学級を利用でき、そのことが本人の意欲にもつながった。
こども園のときから行き渋りはあった。行き渋って登園したとしてもハンガーストライキをして給食を食べなかったり大声で泣き続けることもあったため。	教育委員会の相談窓口	教育委員会の制度として入学事前面談の機会を設けてもらえたため。
引越しして来て、知り合いや友達がないなかったため。	その他（入学先の小学校の先生）	入学前に小学校の先生に相談し、同じような環境の子が多い事が分かったため。
他の友人との関わり方	教育委員会の相談窓口	客観的な意見をいただき、普通学級で問題ないと思えたから。
長時間席に着いてちゃんと先生の話や授業を聞くことができるか心配だった。	その他（療育施設）	幼稚園まで施設は卒業しなければならなかつたが、小学校に入ってからもいつでも相談に乗るとおっしゃってくださった。そういう窓口があるということがとても心強かった。

相談先（入学前）	相談先 (入学前)	良かった相談先 (入学前)	(参考) 良かった数 /相談数
家族	670	120	17.9%
親戚・知人	381	123	32.3%
幼稚園や保育所等の先生	536	253	47.2%
教育委員会の相談窓口	107	38	35.5%
子ども家庭（支援）センターの相談窓口	157	42	26.8%
医療機関	102	19	18.6%
民間の相談窓口	22	7	31.8%
その他	125	101	—
不明	—	136	—
無回答	—	167	—
計	1,000	926	92.6%
不明・無回答率	—	32.7%	
良かった相談先の有効回答率	—	67.3%	

- ✓ 就学前に、子供の状況について、就学支援シート等を活用して**小学校へ事前に情報共有を行えた**ことが**良かった**という意見が多く挙げられた。
- ✓ **入学前に小学校の先生へ相談する**機会に対するニーズが見られた。
- ✓ **就学前に専門家と繋がること**で、特別支援を検討する一助となり、良かったと回答した家庭が多く見られた。
- ✓ **相談して良かった相談先**として最も挙げられたのは、**幼稚園や保育所等の先生**である。（47.2%）

INDEX

0 1

定量調査について

0 2

調査結果

～類似設問への回答比較・分析～

0 3

調査結果

～個別の回答分析～

0 4

参考資料

参考資料

<本調査における不登校傾向の定義>

不登校の要因を分析するに当たり、保護者アンケートへの回答状況から**不登校傾向と非不登校傾向に分類**

【分類方法】

- ① 出席状況に関する設問への回答から、**不登校**を抽出
 - ② ①で「ほとんど毎日学校に行っている」と回答した保護者について、登校渋りの状況に関する設問から、**登校渋り**を抽出
- ①と②を合わせて**「不登校傾向」**とする

設問文	お子様の学校の出席状況（学校に通っている頻度）を教えてください。				
選択肢	ほとんど毎日学校に行っている	週4日くらい	週2~3日くらい	週1日くらい	ほとんど学校に行っていない 全く学校に行っていない

① 不登校（不登校傾向）と定義

設問文	学校に行きたがらない様子を見せるなどの登校渋りの様子は見られますか。			
選択肢	全くない	あまりない	ときどきある	よくある

非不登校傾向と定義

② 登校渋り（不登校傾向）と定義

保護者

<不登校の実態>

- 保護者アンケート「お子様の学校の出席状況（学校に通っている頻度）を教えてください」の設問において、4,157人中**65人**が登校頻度を「週4日以下」と回答

※本設問において、無効回答となったが、他設問への回答状況から、不登校傾向として分析を行ったケースがある

学年	ほとんど毎日学校に行っている	週4日以下						合計
		計	週4日くらい	週2~3日くらい	週1日くらい	ほとんど学校に行っていない	全く学校に行っていない	
小1 (n=1,370)	1,359 (99.2)	11 (0.8)	4 (0.3)	4 (0.3)	1 (0.1)	1 (0.1)	1 (0.1)	1,370
小3 (n=1,412)	1,392 (98.6)	20 (1.4)	7 (0.5)	2 (0.1)	0 (0.0)	5 (0.4)	6 (0.4)	1,412
小6 (n=1,375)	1,341 (97.5)	34 (2.5)	10 (0.7)	5 (0.4)	4 (0.3)	6 (0.4)	9 (0.7)	1,375
合計	4,092 (98.4)	65 (1.6)	21 (0.5)	11 (0.3)	5 (0.1)	12 (0.3)	16 (0.4)	4,157

①不登校（不登校傾向）に該当

学年	全くない	あまりない	ときどきある	よくある	合計
小1 (n=1,350)	780 (57.8)	350 (25.9)	190 (14.1)	30 (2.2)	1,350
小3 (n=1,376)	802 (58.3)	366 (26.6)	187 (13.6)	21 (1.5)	1,376
小6 (n=1,335)	802 (60.1)	367 (27.5)	154 (11.5)	12 (0.9)	1,335
合計	2,384 (58.7)	1,083 (26.7)	531 (13.1)	63 (1.6)	4,061

非不登校傾向に該当

②登校渋り（不登校傾向）に該当

学年	非不登校傾向	不登校傾向	合計
小1 (n = 1,350)		1,130 (83.0)	231 (17.0) 1,361
小3 (n = 1,376)		1,168 (83.7)	228 (16.3) 1,396
小6 (n = 1,335)		1,169 (85.4)	200 (14.6) 1,369
合計	3,467 (84.0)	659 (16.0)	4,126

※表の上段に回答数、下段に構成比を表示（小数点以下第2位四捨五入）

<保護者の回答による不登校傾向・非不登校傾向者数>

- ①「不登校」と②「登校渋り」を合算した**659人(16.0%)**を**不登校傾向**と定義
- 登校渋りの設問で「全くない」・「あまりない」を合算した**3,467人(84.0%)**を**非不登校傾向**と定義

※①と②の母数が異なるため、構成比の合計は一致しない

子供

子供に対しても、保護者と同様に登校意欲に関するアンケートを行い、回答状況から**不登校傾向と非不登校傾向に分類**

※調査結果の分析においては、保護者の回答を基にして不登校傾向・非不登校傾向を分類

登校意欲に関する設問への回答から、不登校傾向（不登校+登校渋り）と非不登校傾向に分類

設問文	学校に行きたくないと思うときはありますか。				
選択肢	全然ない	あまりない	ときどきある	よくある	学校に行っていない

非不登校傾向と定義

不登校または登校渋り（不登校傾向）と定義

<不登校・登校渋りの実態（子供目線）>

- 子供を傷つけることのないよう、直接不登校の理由を聞く設問を設けながら、子供アンケート「学校に行きたくないと思う時がありますか」の設問に対し、「ときどきある」・「よくある」・「学校に行っていない」と回答した者を、不登校傾向と定義
- 上記の設問において、全体の**40.1%**が「ときどきある」・「よくある」と回答

学年	全くない	あまりない	ときどきある	よくある	学校に行っていない	合計
小1 (n = 1,369)	572 (41.8)	229 (16.7)	449 (32.8)	116 (8.5)	3 (0.2)	1,369
小3 (n = 1,407)	448 (31.8)	358 (25.4)	454 (32.3)	140 (10.0)	7 (0.5)	1,407
小6 (n = 1,371)	464 (33.8)	390 (28.4)	395 (28.8)	110 (8.0)	12 (0.9)	1,371
合計	1,484 (35.8)	977 (23.6)	1,298 (31.3)	366 (8.8)	22 (0.5)	4,147

非不登校傾向に該当

不登校または登校渋り（不登校傾向）に該当

<子供の回答による不登校傾向・非不登校傾向者数>

- 不登校傾向** : **1,686人 (40.7%)**
- 非不登校傾向** : **2,461人 (59.3%)**

学年	非不登校傾向	不登校傾向	合計
小1 (n = 1,369)	801 (58.5)	568 (41.5)	1,369
小3 (n = 1,407)	806 (57.3)	601 (42.7)	1,407
小6 (n = 1,371)	854 (62.3)	517 (37.7)	1,371
合計	2,461 (59.3)	1,686 (40.7)	4,147

※表の上段に回答数、下段に構成比を表示（小数点以下第2位四捨五入）

コラム（保護者と子供の不登校・登校渋りに対する認識の差）

- 不登校傾向の家庭とそうでない家庭との比較を行うため、アンケート調査によって保護者と子供にそれぞれ出席状況や登校意欲に関する質問を行い、回答に応じて**不登校傾向・非不登校傾向**に分類（P35～37参照）
- 当初、保護者が自身の子供は不登校傾向と回答した場合、子供も同様に不登校傾向と回答する（保護者と子供の認識が一致する）と想定していたが、**保護者と子供の不登校傾向の認識に相違がある**ケースが見られた

認識の差について

分類①：子供と保護者の回答共に、不登校傾向に分類された世帯

分類②：子供の回答には不登校傾向がみられたが、保護者は子供が不登校傾向と認識していない世帯

分類③：子供の回答には不登校傾向がみられないが、保護者は子供が不登校傾向と認識している世帯

分類④：子供と保護者の回答共に、非不登校傾向に分類された世帯

12.5%
(513世帯)

28.1%
(1,156世帯)
3.6%
(147世帯)

55.9%
(2,302世帯)
※小数第2位切上げ

		保護者の回答		合計
		不登校傾向に分類		
子供の回答	不登校傾向に分類	① 513	② 1,156	1,669
	非不登校傾向に分類	③ 147	④ 2,302	2,449
合計		660	3,458	4,118

□：保護者と子供の認識に相違があった分類

※登校意欲に関する子供の回答が無回答・無効回答であった世帯を除いているため、不登校傾向・非不登校傾向者数(p.36, 37)の合計値と一致しない

保護者と子供の間に、**不登校・登校渋りに対する認識の差**が生じている回答が**全体の約3割**

○子供のみ不登校傾向が見られた世帯の考えられる要因
(上記②のケース)

- 子供の登校渋りのサインに保護者が気づいていない、子供が親に学校に行きたくないことを伝えられていない可能性が示唆される。

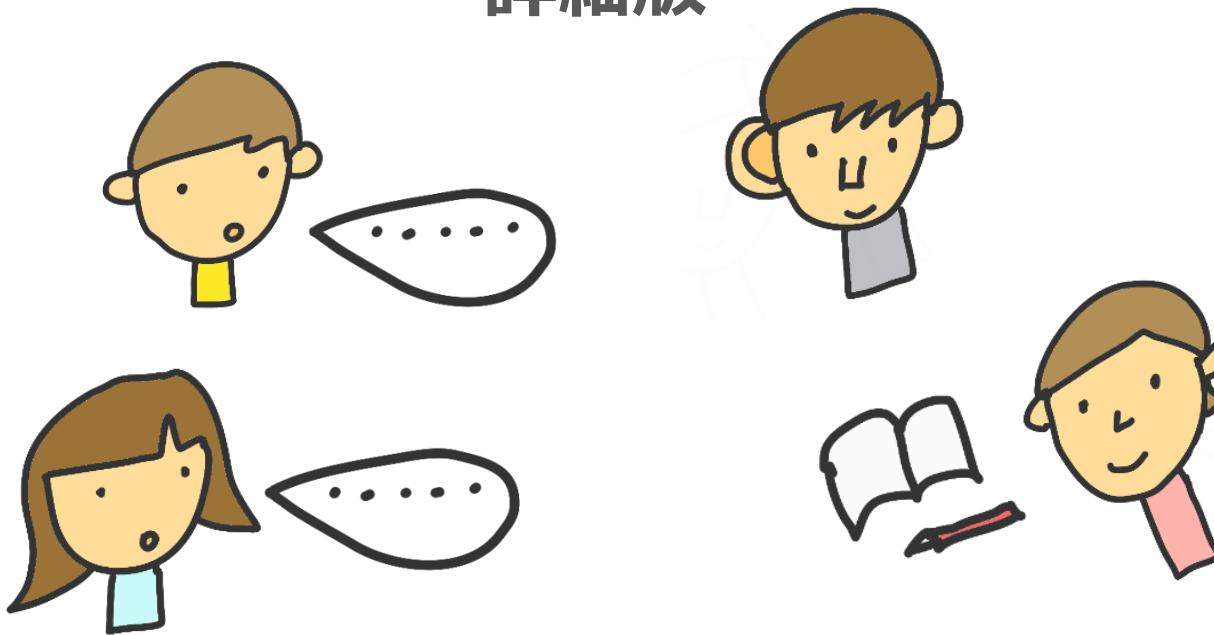
○保護者のみ不登校傾向が見られた世帯の考えられる要因
(上記③のケース)

- 保護者が子供の登校渋りについて、過度に心配や不安を抱えている可能性が示唆される。

不登校の低年齢化に関する実態調査

定性調査

詳細版



INDEX

0 1

定性調査について

0 2

調査結果～子供編～

0 3

調査結果～大人編～

定性調査について

子供ヒアリング

学校の様子を聞くことで子供の心を傷つけることがないよう、子供のアドボカシーの専門家に監修を受け、ヒアリングを設計。また、低学年で思いを言語化しにくい面を補うため、絵カードを作成し、遊びの要素を取り入れ、不登校支援の専門家であるファシリテーターが子供の声を引き出した。

1. ヒアリング人数

204人

(フリースクール、学びの多様化学校、教育支援センター等を利用している小学校1年生～6年生)

2. 実践手法

- ・体 制：子供3名程度に対し、ファシリテーターと補助者の2名を基本配置。子供の状況に応じて個別に対応
- ・形 式：対面で実施。低学年が回答しやすいよう、絵カードを使用



NPO法人全国子どもアドボカシー協議会による監修

本調査を始めるに当たり、学校での様子等を聞くことで子供の心を傷つけることがないよう、子供アドボカシーの専門家として「NPO法人全国子どもアドボカシー協議会」の方々に、質問内容とヒアリング方法の監修を依頼。内容のほか、子供たちとの関係性作りが重要な冒頭の部分について、きめ細やかにアドバイスを頂いた。



大人ヒアリング

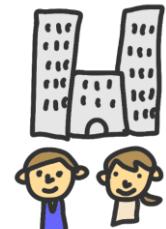
不登校支援の現場に関わる支援者に対し、半構造化インタビュー※を実施。分析に当たり、同席した補助者が文字起こし後、箇条書きにまとめ、ヒアリングの内容をコーディング・カテゴリー分けを行った。※事前に準備した質問を基にしつつ、相手の回答に応じてより詳しく内容を掘り下げるインタビュー形式のこと。

1. ヒアリング人数

40団体 (教育相談員、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、フリースクール等従事者、学びの多様化学校の職員等)

2. 実践手法

- ・体 制：ファシリテーターと補助者の2名を基本配置
- ・形 式：ヒアリング対象者に事前質問フォームへの回答を依頼し、当日はファシリテーターが事前回答を掘り下げる形で実施



INDEX

0 1

定性調査について

0 2

調査結果～子供編～

0 3

調査結果～大人編～

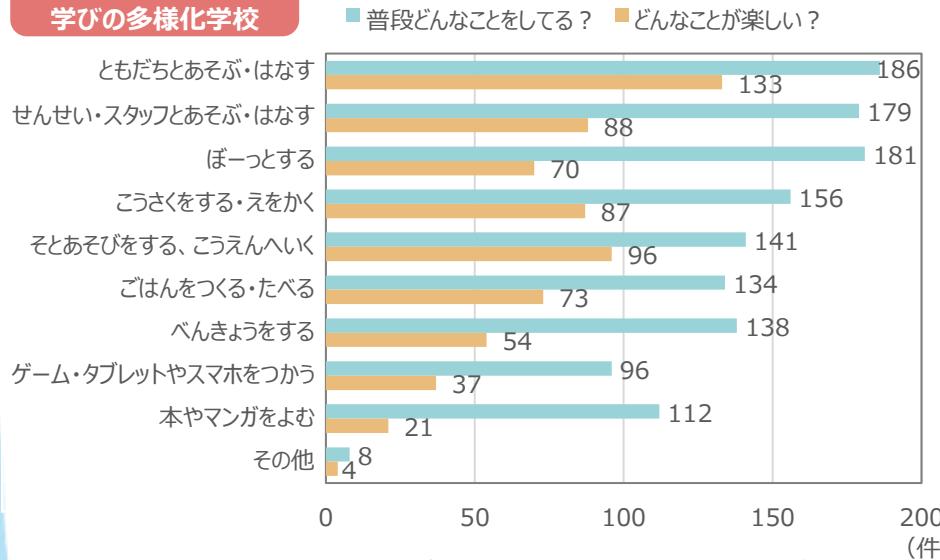


Q.ここ（フリースクール、学びの多様化学校等）で何をしている？何をするのが楽しい？

Q.幼稚園や保育園ではどんなふうに過ごしていた？何をするのが楽しかった？

※複数回答可

フリースクール・ 教育支援センター・ 学びの多様化学校



Q. ここ（フリースクール、学びの多様化学校等）で何をするのが楽しい？

ともだちとあそぶ・はなす

- 友達と遊んで話すのが好き。（小3 ほか）
- 楽しいことありすぎる。友だちとカードゲームしたり、工作したり、押し入れに寝床があって寝たりする。押し入れは人気すぎてぎゅうぎゅうだよ。（小2）

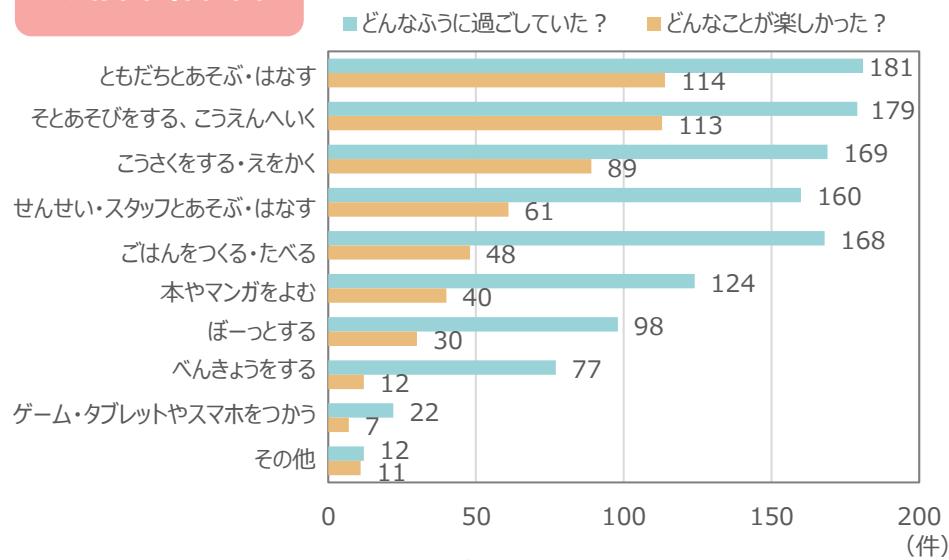
せんせい・スタッフとあそぶ、はなす

- 一緒に遊ぶことが好き。（小3）
- 先生以外に、サポーターの人とかとも話す。（小6）

ぼーっとする

- 畳の部屋でごろごろする。（小3 ほか）
- 時々ぼーっとする。（小5 ほか）

幼稚園・保育園



Q. 幼稚園や保育園では何をするのが楽しかった？

ともだちとあそぶ・はなす

- 友達と遊ぶことが楽しかった。（小2）

そとあそびをする・こうえんへいく

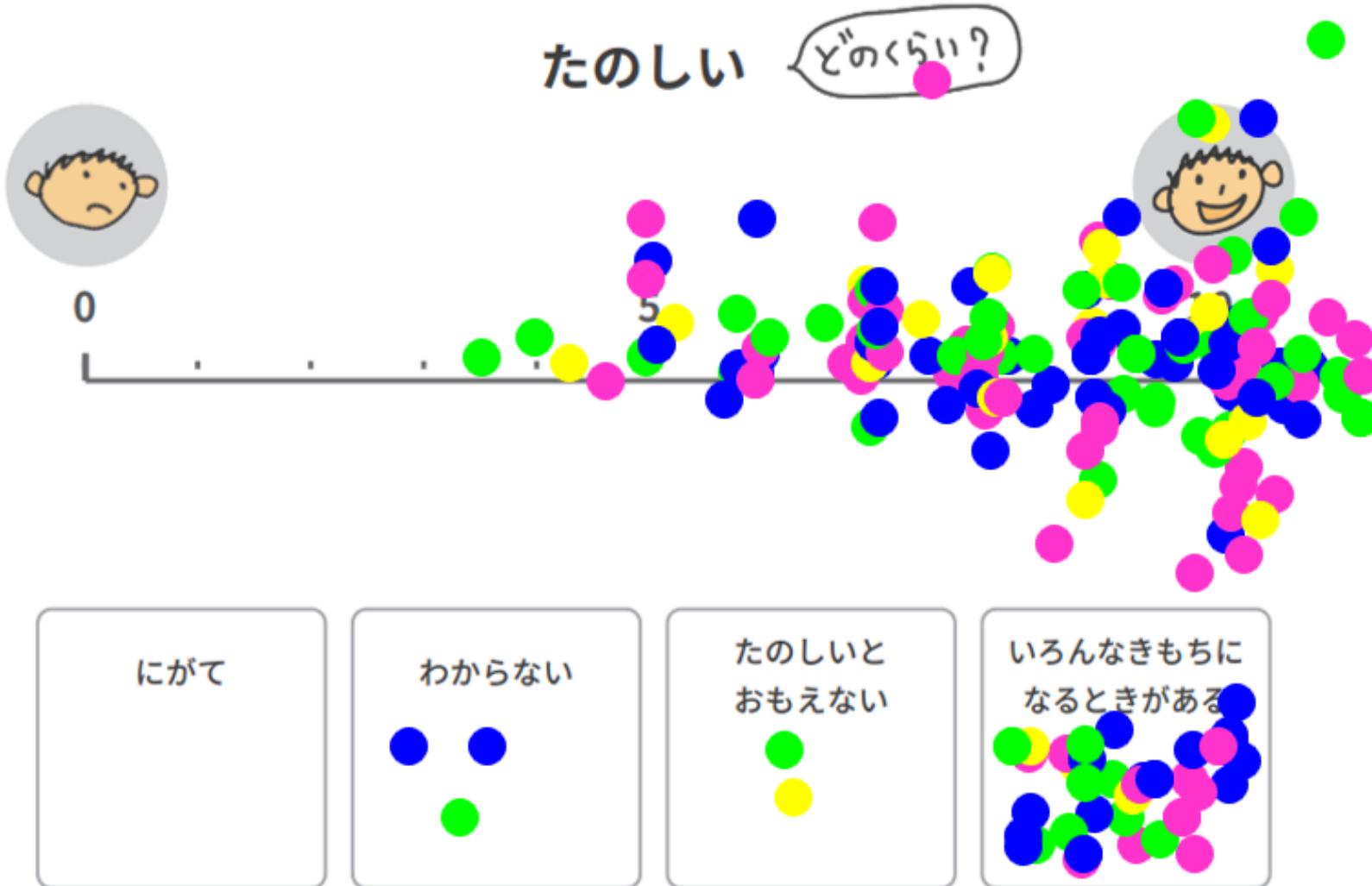
- （自主保育に通っていて）ずっと外にいた。（小2）
- プールもした。（小3）
- 公園に先生と友達で行って、ブランコや鬼ごっこをした。保育園の遊具で遊んだりした。（小6）

こうさくをする・えをかく

- 塗り絵をよくしていて、好きなものを書いていた。（小2）
- たくさん作っていた。この季節だと短冊を作った思い出がある。（小4）

子供

Q.ここ（フリースクール、学びの多様化学校等）は楽しい？どのくらい？

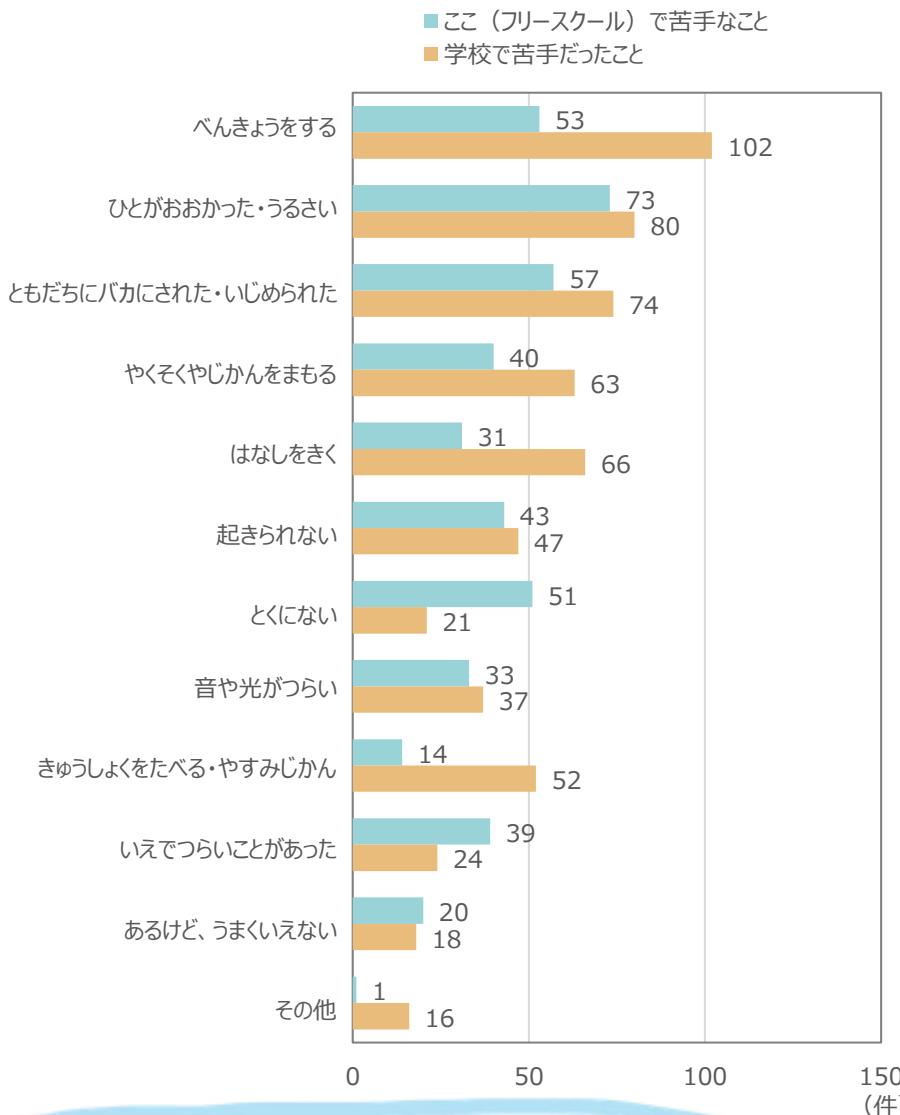




Q. ここ（フリースクール、学びの多様化学校等）で苦手なことはある？

Q. 学校で苦手だったことはある？

※複数回答可



Q6. 学校でにがてだったことはある？

べんきょうをする

- 勉強が面倒くさかった。（小2）
- テストが嫌だった。（小2）
- 勉強が分からんじやなくて勉強が嫌い。音楽は嫌い。英語は好き。（小3）
- 自分で勉強することはいいけど授業が嫌。（小6）

ひとがおおかつた・うるさい

- 以前いたクラスはうるさかった。（小2）

ともだちにバカにされた・いじめられた

- 自分はされてないけど苦手。（小2）
- 1年生の時に友だちにバカにされた・いじめられた。（小3）
- 友だちも先生も学校 자체が嫌だった。（小3）

やくそくやじかんをまもる

- ルールとか起立とか着席とか色々細かいところまで言われて、どっち行けばいいのか分かんないし、ほにやほにや喋られて頭痛くなった。（小3）
- 時間割が多くて嫌だった。（小4）

はなしをきく

- めんどくさい。（小2）
- （はなしを聞くのは）嫌と言うより、だるかった。1年生の時、代わりの先生が、かぎかっこ話してめんどくさくて（実際は短いのに）1時間のように感じた。（小4）

その他

- 1年生の先生は良い先生だったけど、変わっちゃった。（小4）
- 担任ではなく、図工とか音楽の先生と合わなかった。（小6）

INDEX

0 1

定性調査について

0 2

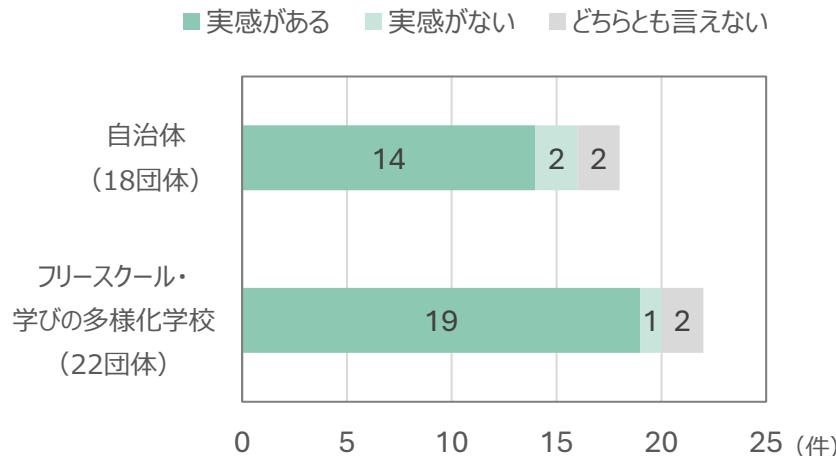
調査結果～子供編～

0 3

調査結果～大人編～



Q. 小学校1年生や低学年の子供の不登校が増えている実感はありますか？ また、それはいつ頃から実感し始めましたか？



<実感がある>

- コロナあたりから増えていると感じている。（フリースクール）
- 数年前に比べて、顕著ではないが、じわじわと増えている。（相談員）
- 10年程前から低学年の子供が来ており、親の会にも小学生の保護者が増えて低年齢化を感じていた。（学びの多様化学校）
- 入学を控えた年長の保護者から見学申込が来る。（フリースクール）

<実感がない>

- 低学年の不登校はあるが、増加の実感はない。（相談員）
- 今年度の新入生は比較的落ち着いており、むしろ減少した印象。（相談員）

<どちらとも言えない>

- 2年前くらいは実感があったが、最近はない。（フリースクール）

コロナ禍が子供たちに与えた影響と社会変化

今回の調査で、コロナ禍が子供たちに与えた影響について、多くの声が聞かれました。以前から存在していた不登校の背景・要因が、コロナ禍を機に加速し、意識の変化などはコロナ後も継続していると考えられます。

• 保護者及び社会全体の価値観の変化：

感染リスクや生活変化を契機に、**保護者が「無理に登校させない」選択を取りやすくな**った。国やメディアの発信も後押しし、不登校が否定的に捉えられにくくなった、との声もあった。

• 幼児期の経験機会の不足：

コロナ禍での登園制限や活動縮小により、**同年代との自然なやり取りや発達段階で必要な経験が不足**。結果、社会性・協調性の発達機会が減少し、学校生活への適応力が低下したとの見方がある。

• 家庭環境や保護者の働き方の変化：

リモートワークなどの普及により、**子供の家での過ごし方が変わったこと**や、スマホや動画を個別に楽しむ等、**自分の好きなことを個別にやることが習慣化した影響**を挙げる声も複数挙がった。



Q. 小学校1年生や低学年は、どんな要因で不登校になっていますか？

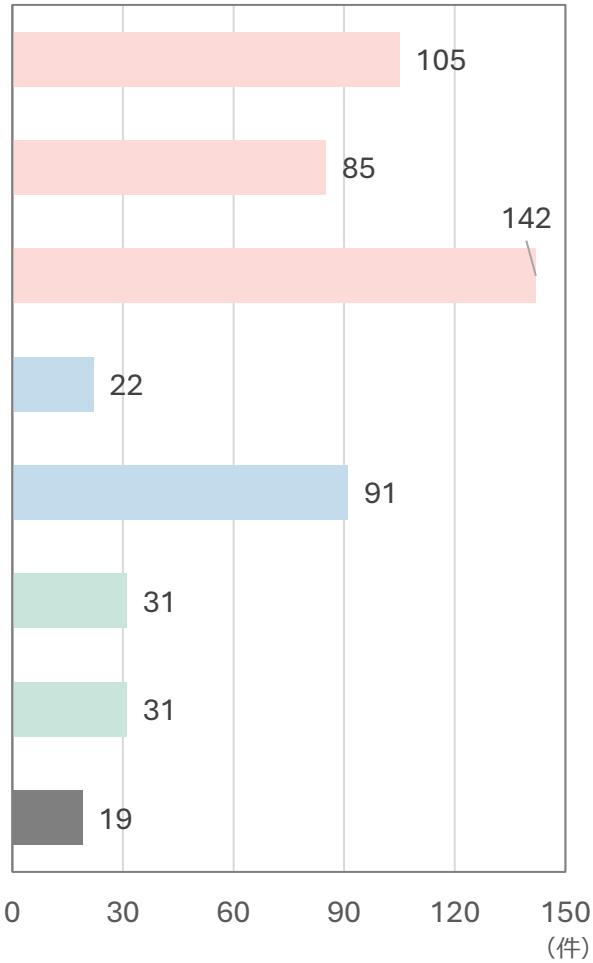
※複数回答可

子供に関する要因

保護者・家庭に関する要因

環境に関する要因

その他



子供に関する要因

<集団生活への不適応>

- 集団生活の難しさとしては、時間の縛り・ルール・人数の多さに慣れていないこと等がある。（相談員）
- じっと座っていられないことで叱られる、時間で行動を区切られたりすることに窮屈を感じたりということが要因となっていると聞く。（フリースクール）

<発達特性や気質>

- 発達障がい（主にADHD、ASD（自閉スペクトラム症）、学習障害など）が要因で不登校になるケースがある。（フリースクール）

<学校への不適応>

- 長時間座ることやじっとしていることが苦痛な子もいる。（フリースクール）
- フリースクールに移って個別対応や選択的活動があり、以前の学校より負担が軽くなり通えるようになった例がある。（学びの多様化学校）
- 「小1ギャップ」が大きく、保育所や幼稚園で自由に遊んでいた子が、小学校での「座りなさい」「返事をしなさい」といった指示に適応できず、困難を感じる。（相談員）
- 保育園では自分の好きなことを選んで遊ぶ環境が増えており、小学校の決められたカリキュラムとのギャップが大きい。（フリースクール）

保護者・家庭に関する要因

<家庭の関わり>

- 保護者、特に母親が不安を感じやすいと、子供もそれを察知して登校をためらう場合がある。言葉で表現できなくても保護者の空気を感じ取っていると思われる。（相談員）
- 兄弟が不登校の場合、本人も不登校になるケースが多い（相談員）

環境に関する要因

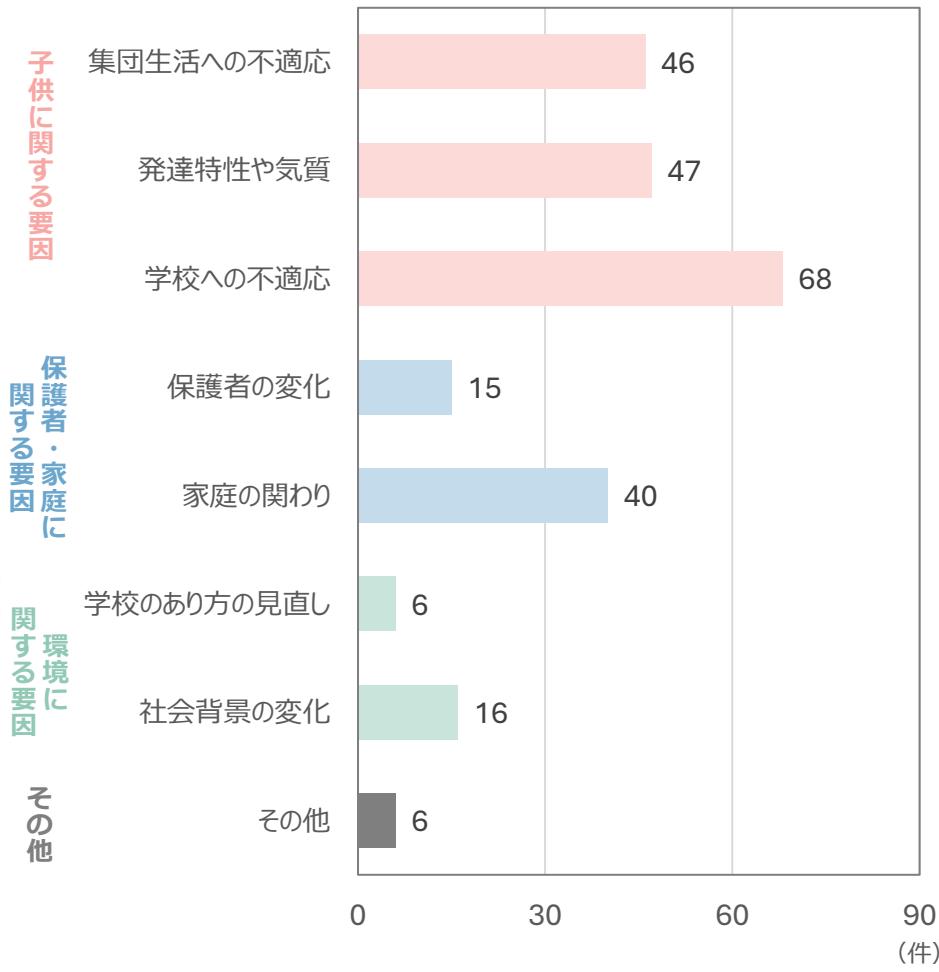
<社会背景の変化>

- 今の低学年は、コロナ禍に1、2歳だったので、外出等の経験不足等の影響も感じる。（相談員）



Q.他の学年の不登校要因との違いがあれば、教えてください。

※複数回答可



子供に関する要因

<集団生活への不適応>

- ・ 小学校1年生の1学期で集団生活が難しいと感じ、「合わない」と表出する子供が増えている印象がある。(相談員)
- ・ 「大人数の集団が苦手」で、実際に「集団が嫌だった」と話す子供も多い。(フリースクール)

<発達特性や気質>

- ・ 騒がしい環境が苦手という子供が多い。中には「自分自身も騒がしいのに、騒がしさが苦手」という子供もいる。(学びの多様化学校)
- ・ あえて言えば、低学年では発達障がい(ASD・ADHD等)の診断が主訴に含まれる割合が高い。(フリースクール)

<学校への不適応>

- ・ 学習内容がわからない、勉強についていけない、友人関係に悩んでいるという話を聞く。(フリースクール)
- ・ 幼稚園・保育所からの環境の違いにより、急な集団環境への変化に適応できない。(相談員)

保護者・家庭に関する要因

<家庭の関わり>

- ・ 高学年以降は本人の意思も強いが、低学年では家庭から受ける影響が大きい。(相談員)

環境に関する要因

<社会背景の変化>

- ・ コロナ禍の影響で、幼稚園・保育所等で集団での活動が制限されたことで、不登校の要因につながった可能性を感じている。(相談員)



Q.ここ5年間くらい（コロナ禍を経て）で不登校の低年齢化が進んでいる要因は何だと思われますか？

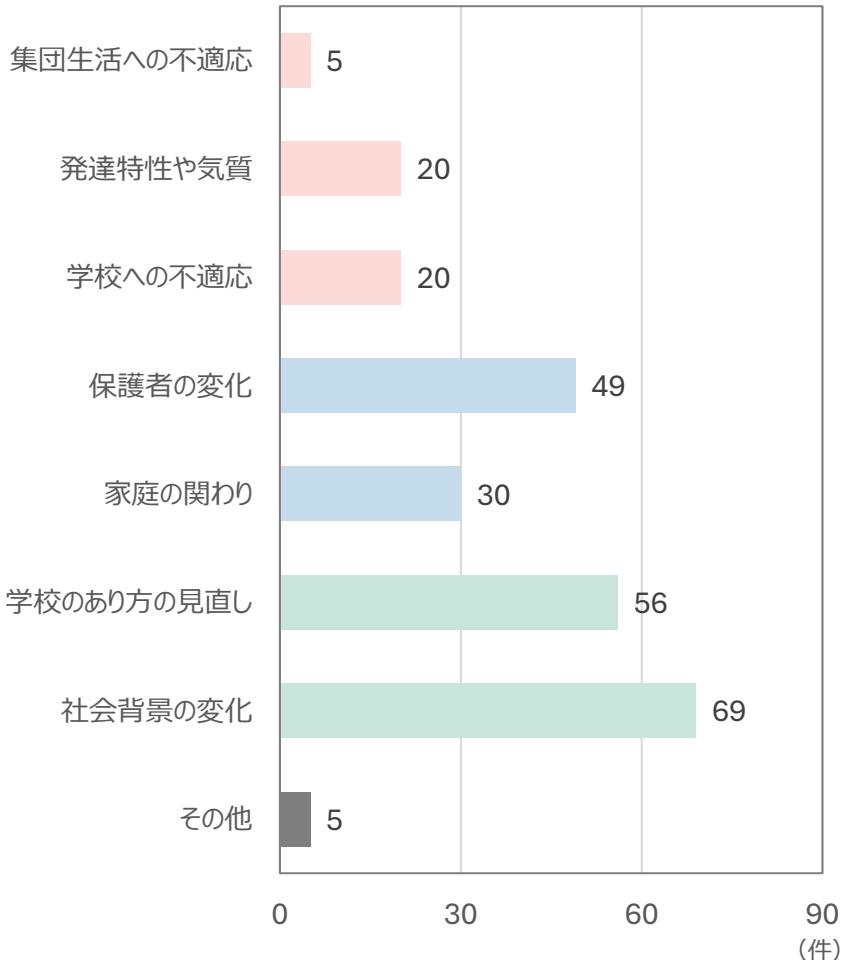
※複数回答可

子供に関する要因

保護者・家庭に関する要因

環境に関する要因

その他



子供に関する要因

<学校への不適応>

- 一般に言われる小1ギャップ（集団になじめない等、特別に配慮が必要な児童）が増加している。（相談員）
- 最近の1年生は、「机に座っていられない」「立って上履きを履けず座ってしまう」等、基本的な生活動作が難しい子供が増えていると感じる。（相談員）

保護者・家庭に関する要因

<保護者の変化>

- テレワークの普及で、「無理に行かせなくてもよい」と考える保護者もいるなど、複数の要素が重なって不登校につながっていると感じる。（相談員）
- 「学校に行かなくてもいい」と、不登校を容認する考え方の広がりにより、早い段階で不登校を受け入れる保護者が増えてきた。（フリースクール）

環境に関する要因

<学校のあり方の見直し>

- 不登校の報道が増え、学校以外の選択肢を柔軟に受け入れる保護者は増えていると感じる。（フリースクール）

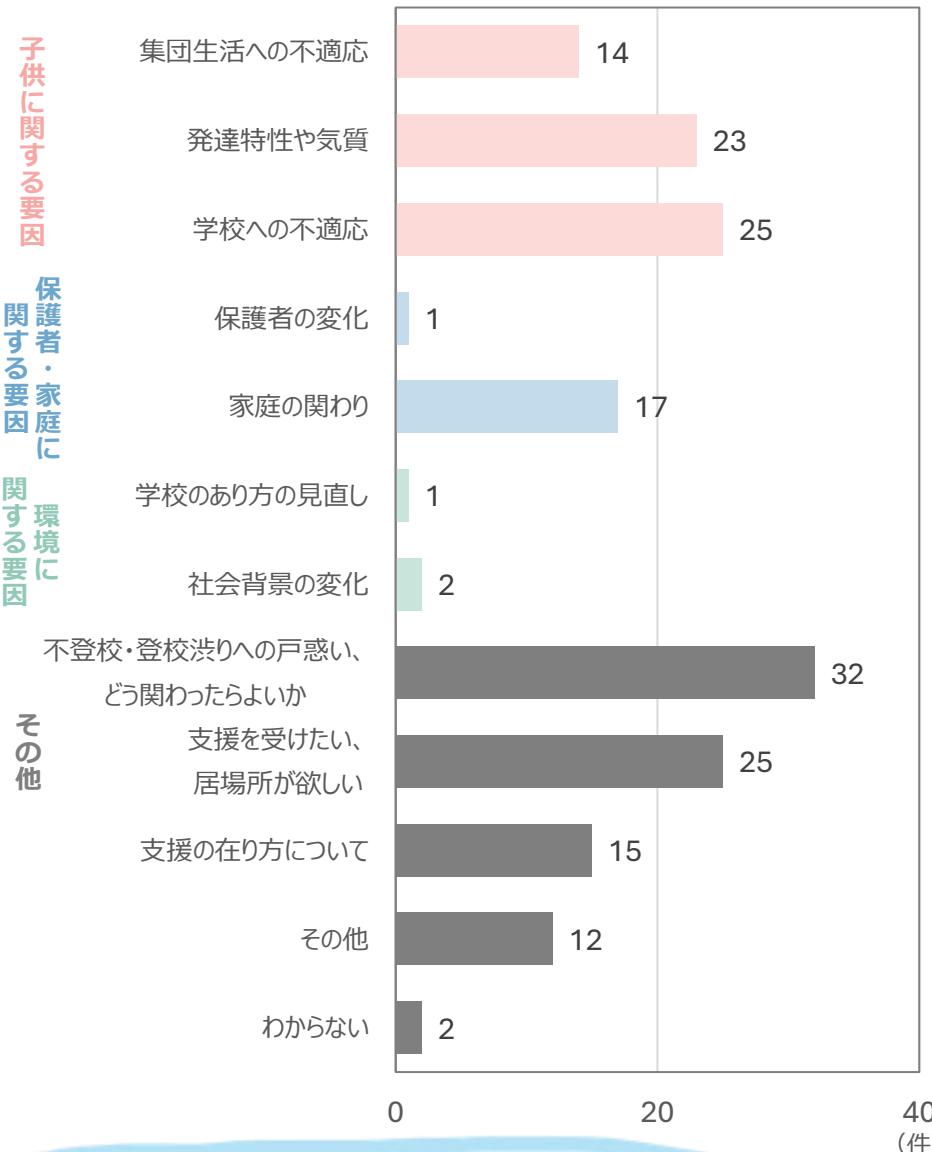
<社会背景の変化>

- コロナ禍で集団行動が制限され、会話や人との距離等を学ぶ必要な時期に経験できなかった。（フリースクール）
- 不登校になる子供はゲーム、スマホ等との付き合い方が下手なケースが多く、ゲームばかりで夜眠れない等が不登校に繋がっている。（フリースクール）
- 社会全体の教育観が変化した結果、画一的な指導が合わない子供が増えている。（学びの多様化学校）
- 「学校に行かなくてもいい理由がある」という認識が広まり、不登校への見方が和らいだ。（フリースクール）



Q. 小学校1年生や低学年、または保護者からどういった相談が多いですか？

※複数回答可



子供に関する要因

<集団生活への不適応>

- ・ケースによっては、子供が「なんか怖い」「通学路が怖い」といった漠然とした不安等の心理的な症状を訴えることがある。（相談員）

<発達特性や気質>

- ・学習への取り組ませ方、癇癪、登校渋り、発達特性の課題（集中力がない、落ち着きがない、指示が入らない、離席等）。（相談員）
- ・読み書きの困難を抱える子供が増えており、学校や勉強を嫌がる原因となっている。（相談員）

<学校への不適応>

- ・低学年の相談では、生活困窮や保護者との対立的関係、登校渋り、学力不振、教師対応への不安が目立つ。（相談員）

保護者・家庭に関する要因

<家庭の関わり>

- ・母親との分離不安も小1、小2特有の相談として見受けられる。（相談員）

その他

<不登校・登校渋りへの戸惑い、どう関わったらよいか>

- ・「どう子供を支援してよいか分からない」という声がある。（相談員）
- ・学校うまくいっていない（関係性を築けていない）、学校に話すと過剰な要求になるのではないか、という相談も多い。（相談員）

<支援を受けたい、居場所が欲しい>

- ・学校に通えないことへの不安から、子供を公的な場に置きたいという相談が多い。（相談員）

<支援の在り方>

- ・プレイセラピーを通じて、「漠然とした不安や恐怖」が根底にあることが多いと感じている。（相談員）

<その他>

- ・低学年の子供は自分の気持ちを言葉にすることが難しく、保護者が「理由がわからない」「言ってくれない」という相談が多い。（相談員）



Q. 小学校1年生や低学年に特有の相談はありますか？ また就学前からの相談はありますか？

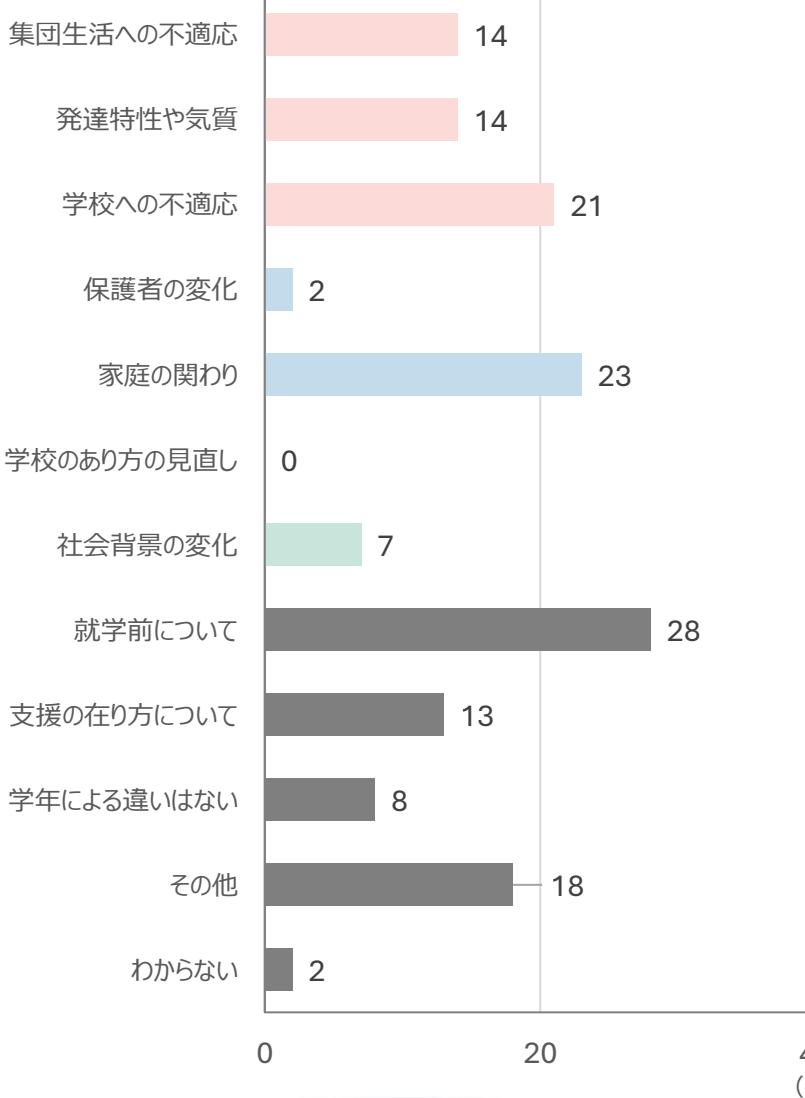
※複数回答可

子供に関する要因

保護者・家庭に関する要因

環境に関する要因

その他



子供に関する要因

<集団生活への不適応>

- ・ 小学校という集団生活への不適応は、特に低学年や就学前から小学校1年生にかけて多い。(相談員)

<発達特性や気質>

- ・ 低学年では、座っていられなかったり、集団が苦手で癪癪を起こし教室から飛び出してしまうことがある。(相談員)

<学校への不適応>

- ・ 構造化された時間や決まったスケジュールに適応する中で、「小学校1年生ギャップ」のような現象が見られる。(相談員)
- ・ 保育所・幼稚園と小学校では環境のギャップが大きく、学校が嫌になる子も多い。(相談員)

保護者・家庭に関する要因

<家庭の関わり>

- ・ 母子分離不安からくる行き渋りや、不登校につながるケースは低学年特有だと感じる。(相談員)

その他

<就学前について>

- ・ 就学前の相談件数は多くない。その年齢では、保健相談所や子供発達支援センター等が発達支援の主な窓口となる。(相談員)
- ・ 就学前検診での専門医からの指摘後に、家庭でのフォローが不十分な家庭もあり、それが不登校に繋がることがある。(相談員)

<支援の在り方について>

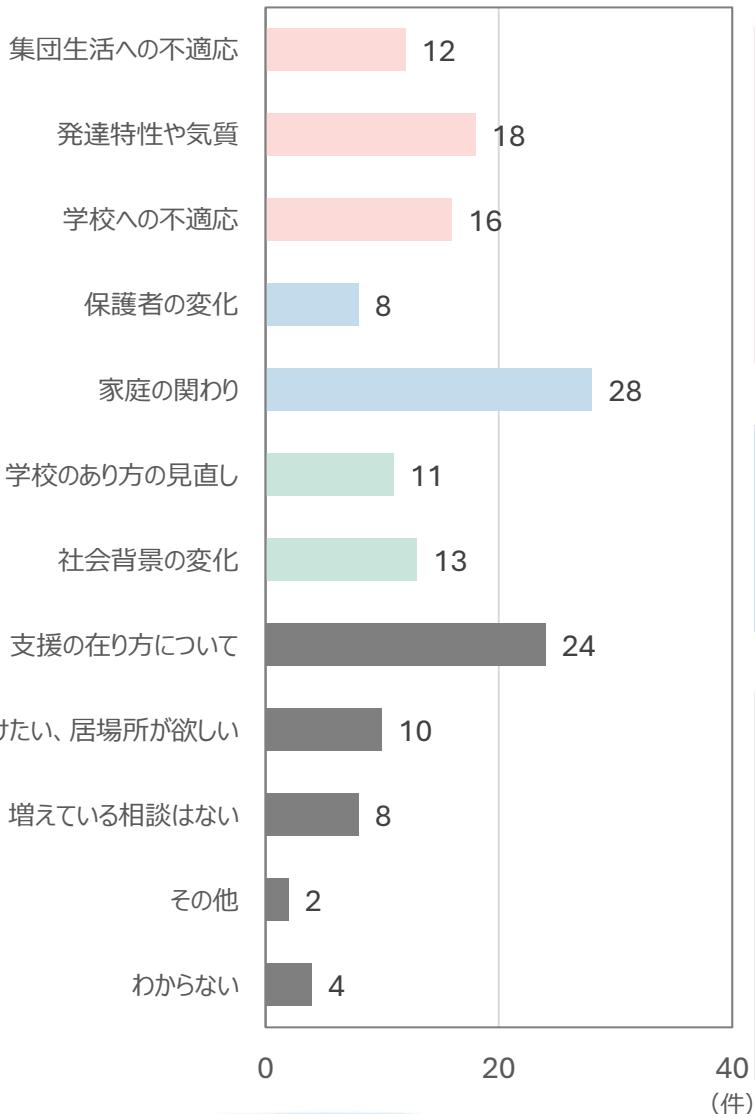
- ・ 相談の多くは学校を経由し、「何らかの支援が必要」と判断された状態で寄せられる。(相談員)



Q.ここ5年間くらい（コロナ禍を経て）で増えてきている相談はありますか？

※複数回答可

子供に関する要因
保護者・家庭に関する要因
環境に関する要因
その他



子供に関する要因

<集団生活への不適応>

- 集団生活に馴染めないという相談が一番多い。（相談員）

<発達特性や気質>

- 発達に関する相談が増加していると感じる。子育て中の困りごとから「もしかして発達に課題があるのでは」といった相談もある。（相談員）

<学校への不適応>

- 小学校入学時に「小1ギャップ」のような状態となり、急な集団環境への適応が難しくなっているケースがみられる。（相談員）

保護者・家庭に関する要因

<家庭の関わり>

- 保護者が忙しく、スマートフォンやゲームに依存する生活になりやすい。（相談員）
- 養育困難家庭の相談は増えている。不登校に加え、物価高やひとり親の増加などで家庭環境が不安定な家庭が増加している。（相談員）

その他

<支援の在り方について>

- 保護者自身が相談や外出をできない状況が長期化する家庭も多い。自ら相談に行けない家庭には、訪問によって本音を引き出す支援が行われている。（相談員）
- 低学年からの相談が増えている。人間関係、保護者、教員、友人、学業、生活リズム、起立性障害等、具体的な背景を把握したうえで相談に来る方もいる。（相談員）

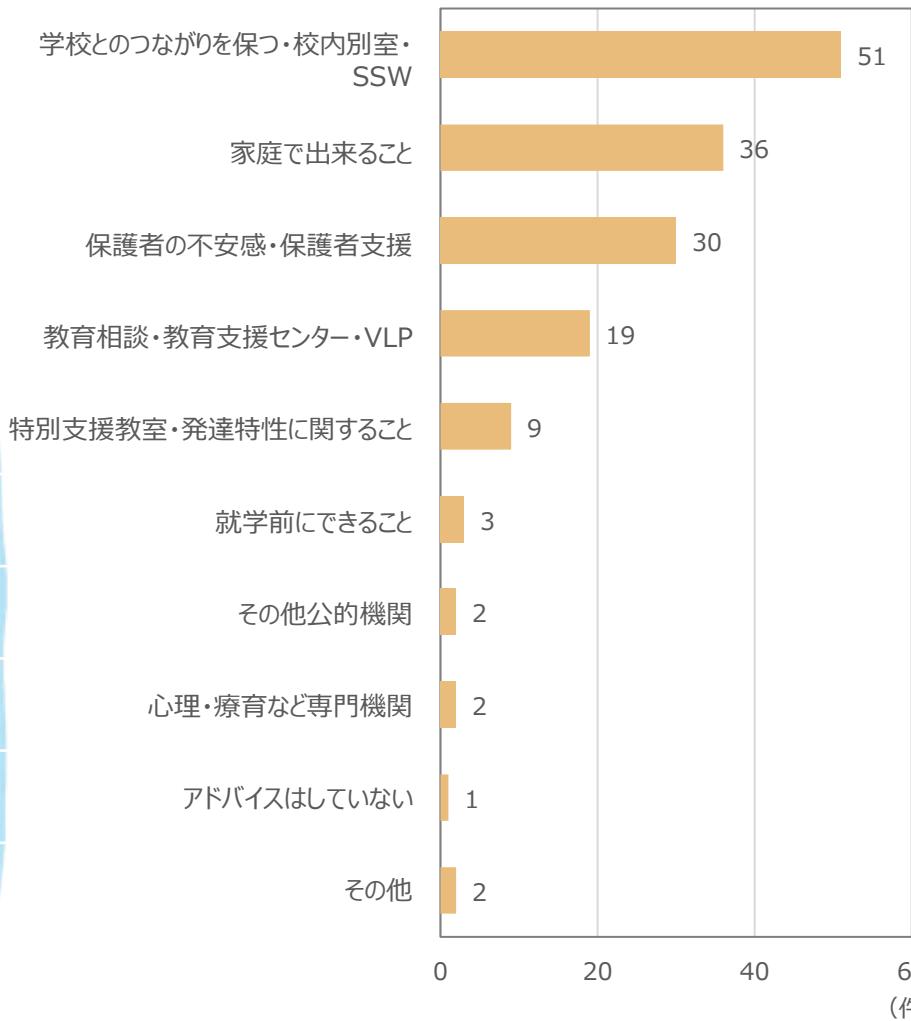
<支援を受けたい、居場所が欲しい>

- 学校外で利用できる施設の情報や、学校外での学習の適切な評価方法に関する利用希望もある。（相談員）



Q. 小学校1年生や低学年（または就学前）の保護者にどんなアドバイスをしていますか？特に有効だったアドバイスはありますか？

※複数回答可



<学校とのつながりを保つ・校内別室・SSW>

- 保護者の意向を尊重しつつ、学校や支援とのつながりを切らさないよう、丁寧に話をする。（相談員）
- 学校＝教室だけではないという視点で、教室以外の保健室、相談室、応接室など子供が過ごしやすい場所を探してみてはと話す。（相談員）

<家庭で出来ること>

- 生活リズムを整えることが子供にとって基本であると伝える。（相談員）
- 子供のできることを捉え、スマールステップで目標を設定し、長い目で見守る。（相談員）

<保護者の不安感・保護者支援>

- 保護者の不安が強いと子供にも伝わりやすく、特に低学年で顕著。（相談員）
- 家庭が不登校に引っ張られて暗くならず、明るい雰囲気を保つよう伝える。（相談員）

<教育相談・教育支援センター・VLP>

- 適応指導教室、別室登校、フリースクール、VLP等、様々な選択肢があり、保護者と子供と話し合って次のステップを決める。（相談員）

<特別支援教室・発達特性に関すること>

- 発達面に課題がある場合は、特別支援教室の活用を提案し、学校や医師等のアプローチを通して支援を開始することもある。（相談員）

<就学前にできること>

- 就学前の保護者には、事前に学校公開や運動会等の見学、通学路を散歩する等、学校へのポジティブな気持ちを育てるようにアドバイスする。（相談員）

<その他公的機関>

- 小学校1、2年生の場合は、入学後に不適応が出るケースが多いため、教育相談や、連携している児童館・図書館を案内する。（相談員）

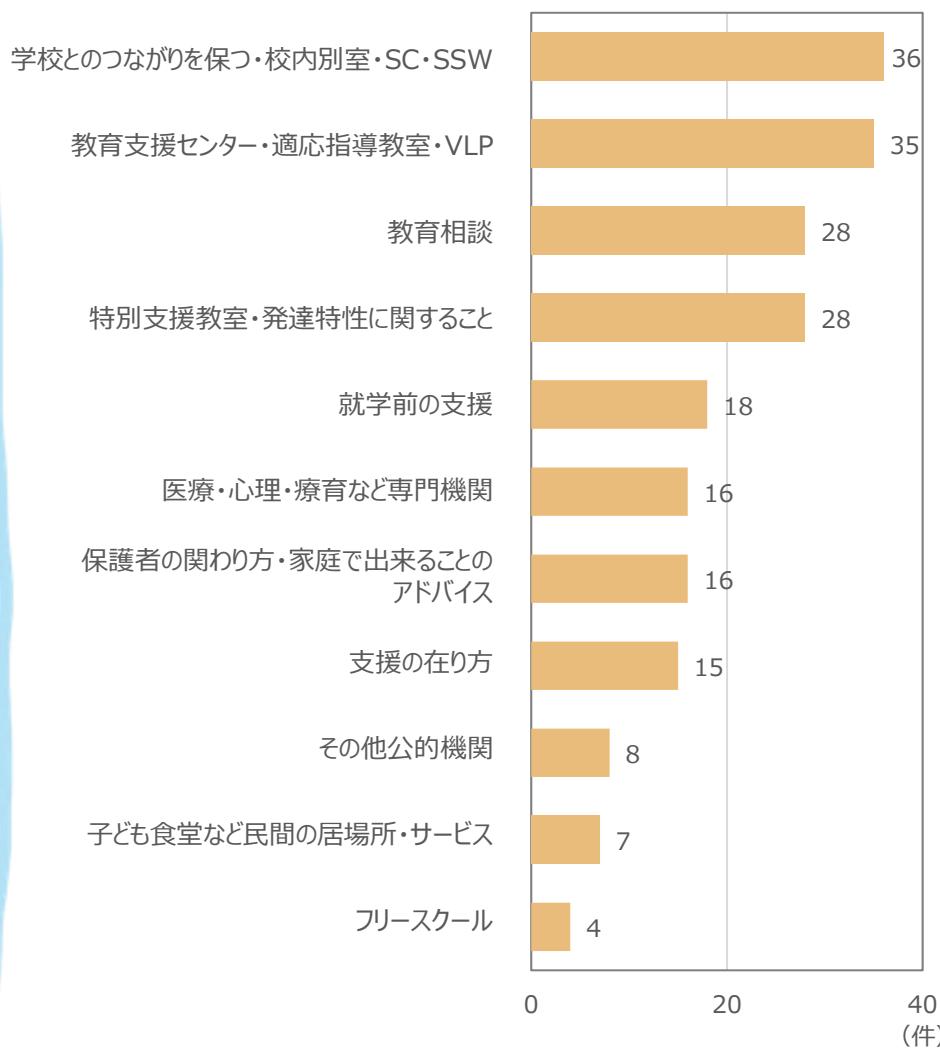
<心理・療育など専門機関>

- 教育相談所や医療等の専門機関への相談を助言する。（相談員）



Q. 小学校1年生や低学年の保護者に紹介している支援は何ですか？ また就学前に紹介している支援はありますか？

※複数回答可



<学校とのつながりを保つ・校内別室・SC・SSW>

- 保護者には「まず学校に相談されましたか？」と確認し、必要に応じて学校にも連絡を入れている。（相談員）

<教育支援センター・適応指導教室・VLP>

- 児童・生徒の状況に応じて、就学相談、児童発達支援センター、子供家庭支援センター、適応指導教室等を紹介している。（相談員）
- 教育支援センターでの活動内容は、個別学習・小集団での運動・自由時間等。調理実習や理科の授業も行っている。（相談員）

<教育相談>

- 感情コントロールや癲癇の相談には、教育相談でのプレイセラピーやペアレントトレーニングを勧める。（相談員）
- 1年生の保護者は、子供が学校に馴染めないと大きなショックを受けるため、新しい場所を紹介することはハードルが高い。まずは悩みを聞いてもらえる場所につなげることが大切だと考えている。（相談員）

<特別支援教室・発達特性に関すること>

- 発達障害や学習障害が疑われる場合は、特別支援教育課や認知特性に関する相談機関を紹介している。（相談員）

<就学前の支援>

- 就学前は、保育所や幼稚園から就学相談につなげてもらい、発達の療育など、養育相談をしながら支援を受けることがある。（相談員）

<医療・心理・療育など専門機関>

- 本人の発達特性による場合は、ソーシャルスキルトレーニング（SST）や療育を勧める場合もある。（相談員）

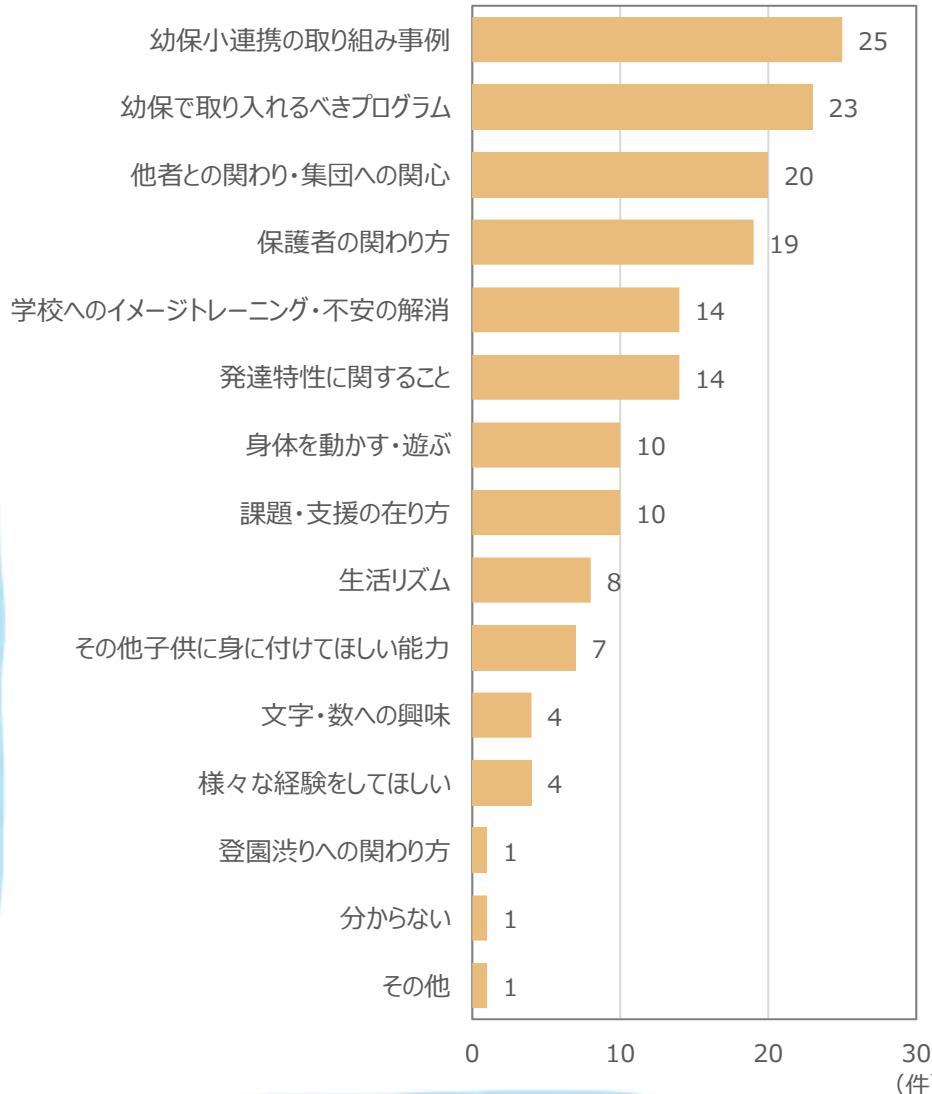
<保護者の関わり方・家庭で出来ることのアドバイス>

- 発達が強く疑われる場合でも、いきなり「発達障害」と伝えるのではなく、他の困りごとのエピソードを探っていく中で助言を考える。（相談員）



Q.就学前の段階から、幼稚園・保育所や家庭で取り組んでおくとよいことはありますか？

※複数回答可



<幼保小連携の取り組み事例>

- ・ 小学校までに身に着けておきたい生活習慣や学校制度の説明を記している冊子を配布しており、幼稚園・保育所からのニーズが高い。（相談員）
- ・ 校長が保育所の保護者会へ参加、小学校の運動会や学芸会に未就学児を招待する等、「小学校は怖くない、大丈夫」と子供や保護者に実感してもらうことを大切にしている。（相談員）

<幼保で取り入れるべきプログラム>

- ・ 保育所や幼稚園でソーシャル・エモーショナル・ラーニング（SEL）などのプログラムをもっと活用すべき。他者との関わりや自己表現を育てる効果が期待される。（相談員）
- ・ 保育所や幼稚園では、遊びを通じた他者とのかかわり（喧嘩や仲直り等）の経験が大切。（相談員）
- ・ 幼保は家庭支援につなげやすい場であり、幼保の段階で、保護者に「困ったら相談してよい」という意識づけを行うことが大切。（相談員）

<他者との関わり・集団への関心>

- ・ 対人関係スキルとして、「相手の嫌なことを言わない」「自分がされて嫌なことはしない」といった基本的な関わり方が重要。（相談員）

<保護者の関わり方>

- ・ 何より家庭で子供を認めてあげてほしい。「これができない」ではなく「これができるようになったね」と肯定的に接することが重要。（相談員）
- ・ 普段は問題のないようにと過保護になりすぎ、いざ問題が起きた時に子供が自力で対処できないという状況も見られる。（相談員）

<学校へのイメージトレーニング・不安の解消>

- ・ 幼稚園・保育所・家庭でも「学校は楽しいところ」というポジティブなイメージづくりが求められている。（相談員）
- ・ 幼稚園・保育所の先生が多くの情報をもっているので、不安な保護者は就学前から園に相談したり、相談室に繋がってもらえばと思う。（相談員）

<発達特性に関すること>

- ・ 早めの相談・医療対応で小学校入学時のギャップを減らせる。（相談員）



Q.不登校に対する保護者の意識の変化を感じますか？

※複数回答可

保護者・家庭に
関する要因

環境に
関する要因

その他

保護者の変化

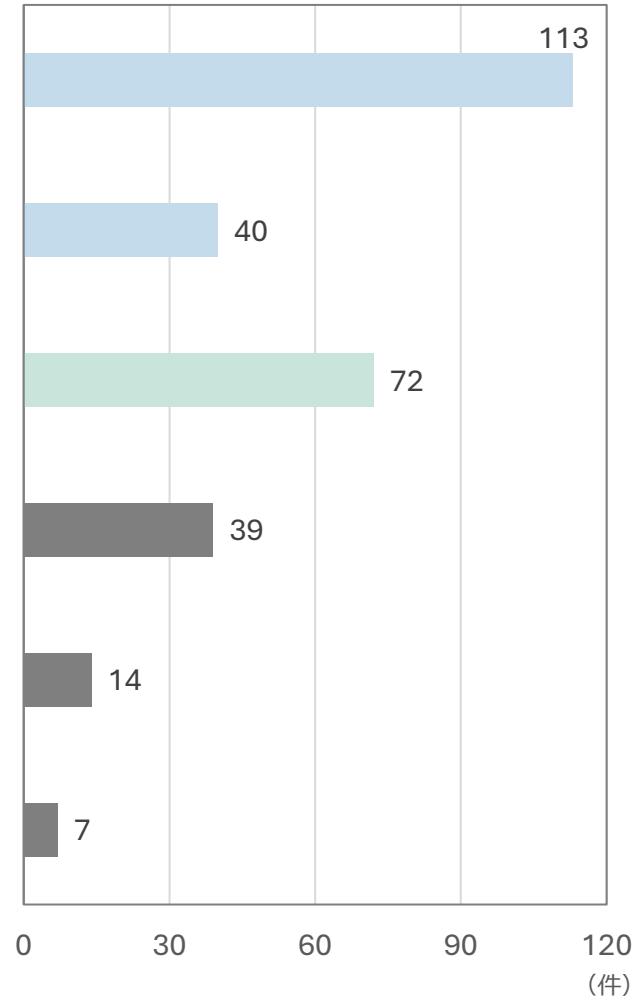
家庭の関わり

環境に関する要因

意識は変わっているが
不安や課題はある

支援の在り方

その他



保護者・家庭に関する要因

<保護者の変化>

- 「学校に行けないこと＝ダメなこと」という価値観が、「学校以外にも学びの場がある」という認識に変化している。（フリースクール）
- 以前は「登校を促す支援」が主流だったが、行けないことを前提にどう支えたいいか、と考える保護者が多くなった。（相談員）

<家庭の関わり>

- 子供が親に対してフラットな関係になり、親子関係も以前と変わってきている。（フリースクール）
- 保護者がシングルだったり、コロナ後も就労できない、しない場合があり、家庭環境が厳しいケースが目立つ。（相談員）

環境に関する要因

<環境に関する要因>

- チャレンジスクールやフリースクール等の選択肢が増えた。（相談員）

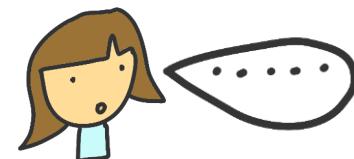
その他

<意識は変わっているが不安や課題はある>

- 学校に行かなくてもいいけれど「どう過ごさせようか」という内容の相談が多い。（相談員）

<支援の在り方>

- 選択肢が増えたことで支援者の対応が難しくなり、子供たち自身も先が見通せず困っている。（相談員）





Q.保護者は、この相談支援をどこで知ることが多いですか？

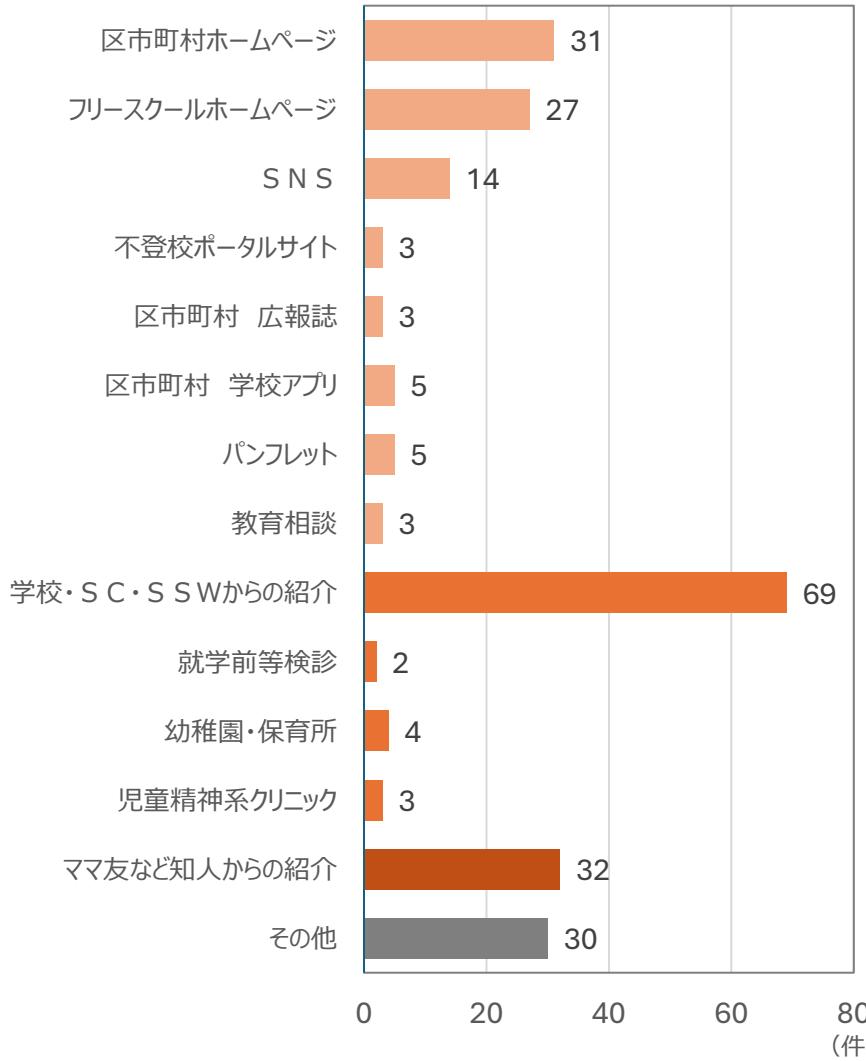
※複数回答可

保護者自身が調べる

学校・行政からの紹介

口コミ

その他



●保護者自身が調べる

<区市町村ホームページ>

- ・ホームページやSNSで知って来られる保護者もいる。（相談員）
- ・支援者が紹介するより、保護者自身がネット検索でフリースクールや居場所を探すケースが多い。（相談員）

<フリースクールホームページ>

- ・公的な支援が合わず、インターネット検索や口コミで民間施設にたどり着く家庭が多い。（フリースクール）

<SNS>

- ・SNSやInstagram、他の組織・団体が紹介してくれた記事をきっかけに知るケースもある。（フリースクール）

●学校・行政からの紹介

<学校・SC・SSWからの紹介>

- ・インターネット以外では、スクールカウンセラー、保健室、スクールソーシャルワーカーを通じてつながるケースがある。（相談員）
- ・学校や医療機関、療育先、小学校の先生からの紹介もある。（フリースクール）

●口コミ

<ママ友など知人からの紹介>

- ・「ネットで見て」よりも「人を介して」の安心感が大きく、特に不登校初期は保護者自身が不安を抱えているため、「信頼できる誰かからの紹介」という形が背中を押すことが多い。（フリースクール）
- ・保護者同士のつながりやママ友、兄弟関係等の紹介で相談につながるケースもあった。（相談員）

●その他

<その他>

- ・特に大型連休明け、夏休み明け、冬休み明けなどは問合せが急増する。（フリースクール）

<保護者の意識の変化>

- 登校させることが重要という価値観ではなく、子供の意思を尊重する価値観に変化してきている。（相談員）
- テレワークにより、子供が休んでも仕事に支障が出にくくなった。（相談員）
- 今的小1の保護者の方が、上の世代よりも「無理ならフリースクールや家庭でもよい」と考える傾向が強いという印象がある。（フリースクール）
- 心身の健康が最優先という価値観から、子供の思いを大事にしたいと考える保護者が増加している。（相談員）

<現状の支援メニューの課題>

- 教室に入れない児童のための校内の居場所づくりが難しい。人の配置や場所の確保の問題がある。（相談員）
- 発達的課題が関係して不登校になる児童も多い。（相談員）
- 小学校で校内別室や適応指導教室の整備が進めば、学校で過ごせる子供が増える可能性がある。（相談員）
- 低学年の子供の受け入れには、集団指導よりも子供の状況に応じた個別対応が必要。（相談員）

<低学年の子供や保護者にあるとよい支援>

- 不登校は誰にでもなる可能性がある。入学準備では不登校についてはほとんど情報がなく、幼児期のうちに保護者向けに情報があれば、子供の状況を落ち着いて理解し、ゆっくり考えられる。（学びの多様化学校）
- 理想は入学前に幼稚園や保育所と情報連携を図り、問題のある子供の情報を小学校に共有すること。それにより学校側も早期に対策を取りやすくなる。（相談員）

<低学年に特有の相談や要望>

- 「学校に行けないこと」への強い不安と葛藤、特に1年生の不登校に対して「早すぎる不登校」という強い不安やショックがある。（フリースクール）
- 自治体の支援策の情報や、身近な地域で通える居場所等の情報がまとまっているわけではないので、情報を求めるケースも多い。（フリースクール）
- 子供が元気になると保護者も変わる。指導よりも伴走という形が望ましいと思っている。（フリースクール）
- 子供のために仕事を辞めた、何をしたということを言う保護者が多いので、保護者にも自分の時間を大切にするよう勧めている。（フリースクール）

<保護者が施設選びで気にしていること>

- 学習支援を求める家庭と、安心できる居場所を求める家庭の2つに分かれる。（相談員）
- 子供の特性への理解と支援を気にされる。（相談員）
- 活動内容、開設曜日や週に何日やっているかも気にしている。（相談員）
- 保護者の希望とお子さんの意思がずれることもあるため、よく相談して決めてもらっている。（相談員）

<復学のきっかけ>

- 4月が最も復学者が多い時期。担任の変更により登校できるようになった例もある。（フリースクール）
- 中学進学、高校進学を機に登校を始めた子の例もある。（フリースクール）
- 低学年の方が、不登校の理由が明確で、それが解消すれば戻りやすい。（フリースクール）
- 復学して、頑張りすぎて疲れてしまった時に、フリースクールを居場所として利用する場合もある。（フリースクール）